



2015(平成 27)年度 横浜市委託事業 日本語学習コーディネート業務

知る

話す

つながる

就学前の子どもと親の支援に関する取組調査・報告会

— 外国人親子の日本語学習支援子育て支援事情 —

実施報告書



公益財団法人 横浜市国際交流協会(YOKE)

2016年 3月

はじめに

本報告書は、公益財団法人横浜市国際交流協会（YOKE）が2014（平成26）年度に実施した、「就学前の子どもと親の支援に関する取組調査」（※）（以下、「取組調査」という。）の報告会の記録です。

「取組調査」では、子育て中の外国人の日本語学習支援、子育て支援のニーズを受け、関連団体へのヒアリングなどを行いました。日本語教室だけでなく子育て支援団体へも訪問したことで、地域には多様な状況があるとともに、既に様々な取組が行われていること、さらに、日本語学習支援と子育て支援におけるニーズの重なり、連携の可能性なども見えてきました。

今回の報告会では、今後の日本語学習支援分野と子育て支援分野との連携を図るという「取組調査」の目的に沿い、参加者が現場での取り組みを「知り」、知ったうえで参加者自身の経験や思いを「話し」、そして、お互いが「つながる」きっかけとなることを目指しました。

登壇者には、日本語教育専門家を始め、「取組調査」のヒアリング団体のなかから日本語教室、保育園、地域子育て支援拠点で外国人親子に関わる人たち、さらには、日本での子育て経験を持つ外国出身の保護者と、それぞれの地域・立場で活躍する皆さんに、現場の取り組みを中心とした発表をいただきました。また、参加者も、日本語学習支援や子育て支援にかかわる方たちや子育て経験のある外国人保護者など、実践の場を持つ方々が多く集まり、お互いの取組や知識から学ぶ場となったかと思えます。それは、「日本語学習支援・子育て支援を地域ぐるみで行うためにできることは？」を問いとしたグループディスカッションで、会場が熱気に包まれ、話し合いが尽きなかったことに象徴されていました。

本報告会参加後に、団体間の交流や具体的な事業が始まったという嬉しい話も聞いていますが、この取組を一過性のものとするのではなく、外国の子育て世代の方はもとより、誰にとっても暮らしやすいまちになることに少しでも貢献できるのであれば、何よりの喜びです。

なお、報告会開催および本報告書作成にあたっては、登壇者を始め、多くの方のお力をいただきました。ご協力くださった皆様に、この場をお借りしてお礼を申し上げます。

2016年3月

公益財団法人横浜市国際交流協会（YOKE）

（※）「就学前の子どもと親の支援に関する取組調査」については、以下の報告書をご覧ください。

「横浜で生活する就学前の外国人親子のための日本語支援・子育て支援調査報告書」（2015年3月）

http://www.yoke.or.jp/8nihongo/8nihongo_gakushu_shien.html

目 次

はじめに	p.1
目 次	p.2
開催概要	p.2

第1部 基調講演及び調査報告

- 1 基調講演 「日本語学習支援・子育て支援を地域ぐるみで」
石井 恵理子先生（東京女子大学現代教養学部教授） p.3
- 2 調査報告 「就学前の子どもと親の支援に関する取組調査報告」
公益財団法人 横浜市国際交流協会 藤井 美香 p.12

第2部 現場からの取組報告・パネルディスカッション

「外国人親子の日本語学習支援・子育て支援事情」 p.16

コーディネーター:唐木澤みどりさん(早稲田大学大学院日本語教育研究科博士後期課程)

- 1 現場からの取組報告
 - ハンナの会（日本語学習支援）川口 世津子さん p.17
 - 横浜市 北上飯田保育園（子育て支援の場での日本語支援） 本間 深雪 さん p.19
 - 港北区地域子育て支援拠点 だろっぷ（子育て支援） 原 美紀 さん p.21
 - フィリピン出身・保育園勤務（外国出身の保護者） 濱崎 杏莉 さん p.23
 - 取組報告へのコメント p.25
- 2 全体ディスカッション p.32

開催概要

就学前の子どもと親の支援に関する取組調査・報告会

～外国人親子の日本語学習支援子育て支援事情～

日 時 2015年8月30日（日）13時～16時

会 場 横浜市開港記念会館6号室

参加者数 70人

- 目 的 ・2014年度に実施した取組調査報告をきっかけに、
就学前の子どもと親の日本語支援、子育て支援の状況を知る機会とする。
・日本語支援と子育て支援の、新たな連携の可能性を考える。
・日本語支援者と子育て支援者、そして外国人当事者が互いに知り合う機会とする。

主 催 公益財団法人横浜市国際交流協会（横浜市国際局委託事業）

後 援 横浜市こども青少年局

1 基調講演

日本語学習支援・子育て支援を地域ぐるみで

石井恵理子先生（東京女子大学現代教養学部教授）



○司会（横浜市国際交流協会事務局次長 坂本淳）

石井恵理子先生は横浜市とのかかわりも深く、平成25年度の横浜市外国人意識調査インタビュー調査、また、横浜市日本語学習コーディネート業務などについて、ご協力やご助言をいただいております。それではよろしく願います。（拍手）

○石井

石井でございます。きょうお集まりの皆さんの中には、お話する内容に関して、もう十分なご経験・実践を積み重ねていらっしゃる方が多いかと思いますが、この後、皆さんでのグループディスカッションがありますので、そのときの論点の整理というふうな形で聞いていただければと思います。

異文化で子どもを育てるとのこと

今回我々が考えようとするのは、日本語・日本社会・日本文化というものが、異文化である方たちにとっての子育てです。子どもがいない状態で日本にいらしてから子どもを持つという方と、お子さんと一緒に移動していらした方と、いろんなケースがあると思いますけれども、とりあえずは、日本でお子さんを育てることをスタートした場合で考えますと、子どもがいない生活から子どもがいる生活に移るといことは、実はものすごく大きな変化があります。親となった人の世界が、今までと変わってくるということなのです。

子どもがいない生活から 子どもがいる生活へ

子どもがいないうちは、場合によっては日本社会とそんなに深く接点を持たなくても日常生活が送れてしまうということがありますが、子どもが生まれた瞬間に、今まで経験していなかつ

たこと・経験していなかった場や相手との接点が、本当に増えてきます。例えば、私自身を振り返ってもそうですけれども、仕事をする人間からすると、大人として動いている場合には、地域社会と関わりを持たずに生きていることのほうが多くて、むしろ職場がある地域・エリアであるとか、そういうところで動いています。

けれども子どもができた瞬間に、自分の家の周りのことをよく知らないと子育てができないところからスタートして、**今まで見てきた日本社会の違う部分、違う層がたくさん見えるようになってきます。**今までいろんなことをスムーズにやってきたはずなのに新しい世界になった途端に、日本語が母語の私自身でもかなり戸惑うことがありましたし、あることを知りたいと思ったときに、一体どこに行ったら情報が入るのかということすらわからなくなるということが、大変大きかったと思います。

それから、**意識が変わります**。大人として生き
ているうちには、多少の不自由さはあっても自分
の優先順位で「ちょっと我慢しておこう」「100%
改善されなくても、こっちで満足しているからい
いや」というふうに考えることもできるわけで
す。自分が何か困ったときは、とりあえず目をつ
ぶっていられたことが、子どものことになってく
ると、そうはいかない。子どもに起こったことは
自分自身のこととは違うので、自分がちゃんとケ
アできるという保障がないことに関しては、相談
できる相手や相談を持ち込む場所を確保するこ
とか、あるいはそういう問題が起こらないように、
どことどういう連絡をとっておいたらいいのか
ということを知っておくことが、必要なわけ
です。簡単な話でいえば、大人の場合は、自分の体
調でしたら自分で確認できますから、ちょっとぐ
らい熱があっても別にそれでいいや、それほどた
いしたことじゃないというふうにやり過ごすこ
とができます。でも、子どもが熱を出したときに、
私の判断でいいのか、誰に判断してもらう必要があ
るのかということが、まず大きな疑問となります。

日本の生活が長い人でも、 日本人でも同じ

子どもができるということは、社会にどのくら
いしっかりかかわって生きていくかという、大き
な意識変化をもたらします。今まで自分の力で十
分と思っていた、自分ができることの範囲を超え
て、新たに学ばなければいけないことがたくさん

子育ては社会の中で行われる

子育てをする親の立場から考えても、非常にい
ろんなことが起こるわけですが、大事なこ
とは、**親自身も社会の中で自分のポジショニング、
位置づけというものがあ**り、**その中で子育てする**
ということです。特に子どもができると、地域社会
とのかかわりとか、自分がかかわる世界がどんど

出てくるわけです。ですから、**今までの私の生活
にプラスで、ここに子どもがいるという話では全然な
い**ということです。子育てをしながら、さまざま
な新しい葛藤というものがいっぱい出てくる。新
しい経験をし、新しい社会や人とかかわらなけれ
ばならないというように、**親自身が変わっていく
プロセス**だということでもあります。ですから、
日本での生活が長くて「サポートはもういらぬ」と
いう方にとっても、子育てが始まった瞬間に、新
しいサポート体制が必要になるということは当
然あります。それは、先ほど「私自身も」と言い
ましたけれど、日本語に不自由はなく、日本社会
でずっと生きてきた人間にとっても、同じように**自分
自身が変**わる瞬間が訪れるということになります。

異文化社会への移動の大変さ

ただ、大きく違うのは、異文化社会の日本に移
動してきた方は、日本語もまだ十分ではなくコミ
ュニケーションも大変という部分での不自由も
あるかもしれない。またそこはクリアできてい
ても、日本の社会システムがどうなっているかとい
うことを、体験的に理解していない。そして大き
なことは、価値観とか何を優先するかという判断
が、周りの人たちと一致しているとは限らないと
いう、**異文化社会を移動してきた人だからこそ直面
する、さまざまな大変さがたくさんある**というこ
とを、まず前提に考えていく必要があると思います。

ん広がります。その中で自分自身の意思だけでは
なくて、その社会では子どもを育てるというこ
とをどう考えているとか、どういうシステムを持
っているかということと、非常に深いかかわり
を持って子育てをするということになります。

子どもは、周りからさまざまなメッセージを受け取りながら育つ

まだ親が連れていけないとどこにも行けないという段階の子どもであれば、親の意のままにという部分もありますが、あつという間に子どもは育って行って、周りの様々な人と接するわけです。親だけと接するというケースは、まれにしかあり得ないわけです。そうすると、親が好むと好まざるとにかかわらず、親の価値観と異なる価値観に触れたり、親からすれば使わせたくない言葉や見せたくない世界と接することがいくらでもありますから、**子どもはいろいろなメッセージを受け取りながら育ちます**。日本語・日本文化の人間でも、自分が思うような環境で純粹培養のように子どもを育てるということは不可能ですし、まして、自分は「これが大事」と思っていることが、異文化の社会の中では、優先順位があんまり上ではないとか、むしろそうでないことのほうが評価されるなどということにぶつかることが、たくさんあります。その影響は、子どもが成長すればするほど大きくなっていきます。子どもが一人でどんどん遊びに行けるようになり、つき合う相手を自分で選ぶようになりということになれば、外の世界のほうが比重としては大きくなります。

これは相対的にということ、親の存在自体が小さくなるという話では必ずしもないですけど、**その子にとっての世界の中で、親の部分というのが小さくなってくる**のです。親としても、多くの葛藤を経験しながら育てていくということであるわけですが、親には親の考えがあるのと同時に、子どもは子どもで小さいながらも、いろんなことを自分の意志で選んでいきます。そこで**さまざまな葛藤が生じる**わけで、特に異文化の子育ての場合にさまざまな問題を生むこととなります。

参加者 アンケートより

- 異文化での子育てでぶつかるいろいろな問題点が聞けて、とても参考になった。
- 先生のお話、子どもがいるといないでは関わる世界が変わるという言葉が、男性の耳にもよく残っていた。私たちも実感としてうなづけた。

親は、子どもを見ると同時に、周りの人々を意識する

それから、**親は子どもだけを見ているのではなく、周りの人々を意識して子どもに対応している**ということがあります。子育ての経験がある方はぴんとくると思うのですが、自分の家の中で子どもを叱るときに叱り方と、外出中に子どもを叱る叱り方は、多分同じじゃないことのほうが多いと思うんですね。親が子どもを叱るとき、子どもと2人だけのときは子どもにメッセージを伝えることだけを意識します。ところが外に出たときに、**自分がこういうやり方でメッセージを発していることを、周りの人々がどう見ているか**を親は意識します。異文化の人たちは、家の中では自分の文化や価値観に沿った対応をすることが比較的自由にできるでしょうが、外に出たときにそれを同じようにやると、自分に対しても、あるいは育てている子どもに対しても、周りの人から自分の意識とは違う見方をされてしまうかもしれないなど、迷いが生じることがあります。それは親にとって結構大変なこと。家庭の中に異文化が存在する場合、家庭の中でも自分がこう育てたい、こういうメッセージを子どもに伝えたいけれども、配偶者がどう思うかと考えたり、**常に異文化の中で、摩擦とか葛藤というものを感じながら子育てを行っていく**ということがあるかもしれません。

異文化の子育ては、様々な価値観や習慣を意識するプロセスとなる

ですから、子育てをするプロセスを踏むことで、親は**今まではあまり気がつかなかった様々な価値観とか習慣を意識すること**になります。大人同士だと、異文化の人に「あなたのそのやり方はおかしい」と感じて、メッセージを直接的に出す

とは限りませんが、例えば子どもが何かをやったときには、周りの大人たちが子どもについて褒めたり、叱ったり、指導したりします。それによって、「この社会では、こういうことをいいと思う価値観を持っているんだ」、あるいは逆に、「こういうことはだめだと言われちゃうんだ」ということがはっきりすることもあります。今までは何となく「違うかもしれない」と感じて「そのままでもいいや、私は私の好きなようにやられている」とやり過ごしていたところが、**自分が子どもに伝えようとしていた価値観と違うものが外から来るのだ**ということに気づいたときに、どのように対処したらいいのだろうか、また葛藤が生まれます。

2つの価値観のはざま

当然、子どもが1人で行動するようになれば、親が大事だと思って教えたことを子どもがちゃんとキャッチしてそのようにふるまったときに、外でネガティブな反応を受けることがあると、子どもはすごく混乱します。大人は違う反応を見たときに、「これは文化が違うからだ」と自分

の中に収められますが、まだ成長の過程にある子どもは世の中にどういうルールがあるのか、どういう価値観があるのかということをまさに学んでいる最中なので、**家の中でやったときにOKだったことが、外でだめ出しをされるということは、学んでいく価値観にぶれが生じるということ、非常に大きな混乱を招くことがあります。**そのことが原因で、非常に反抗的に見えるような行動をとってしまったり、2つの価値観のはざままで自分がどうやったらいいいかわからないという状況から、さまざまなトラブルが起こることは、学校や保育園とか幼稚園でもよく見られます。

集団の中では周りのみんなと合わせるということを要求される場合がとて多いですから、そういうときに、うちでは褒めてもらえることなのに、外で同じことをやったら、その集団の中では非常にまずい状況が起こってしまうこともあります。このように、親は自分で一生懸命に子育てをしますが、**社会全体からのメッセージを子どもが受ける、それから親も受ける、親子が一緒に受ける**という、いろんなパターンがあって進んでいくということがあります。

子育てには、ライフコースの見通しが必要

子育てにおいて特に乳幼時期はとても大変ですが、人とのつながりができると、サポートを結構たくさん得られる可能性があります。そしてもう一つのポイントですが、子育ては、この子が育っていった先に、**どういうライフコースが待っているのかということの見通し**が大事です。今の問題を解決することと同時に、今すぐどうなるということではないけれど、この先にはこうい

うことが待っているから、ゆっくりゆっくり少しずつでもいいから準備をしていこうという、そういう**長期的な視点での子育てプラン**があるはずなのです。

「今、ここ」の情報だけでは足りない

たとえば、学校制度がどうなっているか、社会に出ていくステップはどうなっていて、どのタイ

参加者 アンケートより

- そうかなと思っていたことがクリアになり自信がもてた。母語が大事。情報の共有システム化。
- 石井先生のお話、とてもわかりやすく、子育て中のママが何語で子育てするか悩んでいる方が多い中、「母語で」と言ってあげられるとママたちは本当に安心できると思いました。

ミングでどんなハードルがあるか、その先で経済的に自立するには何が必要かなど、いろんな問題がありますけれど、それは国や社会によって異なります。日本の学校は、何かよほど特殊なことがない限り年齢とともに自動的に学年が上がっていきます。でも、そうではない国もたくさんあって、その学年でやるべきことができなかつた場合は、もう一回やり直しということになります。そういうものだと思っている親御さんは、順調に子どもの学年が上がっていているということで、「うちの子は学校で十分ちゃんとやれている」と思うわけです。ところが、学年が進んだところで「おたくのお子さんは、ここまでの学年の勉強に全然ついてこられていない状況ですよ。高校進学は難しいです」といきなり言われて、親としてみたら余りにもひどい話だということで、そこで本当に混乱してしまうこともあるわけです。

そういうことも含めて、**ライフコースの見通しをどの位つけているか**ということ自体が、非常に大事です。親が、子どもに何が必要なのかを決めていくとか選ぶということはたくさんありますけれども、**いろんな選択肢の中で何を選ぶのか、どう決めるのか**ということは、**今見えていること、現時点についての情報だけでは足りない**ということなのです。

一つ一つ考えて決めることが次のステップに生きる

しっかり選んで決めても、思うとおりにはいきません。自分がそのときにできる限りの情報を得て、その上でこれは大事だと思って決めたことがそのとおりにうまくいかなかったときには、それを**決めたステップのところに戻って「これを**

やり直そう」と考えることです。でも、決めるための材料も何もない中でうまくいかなかったときには、どこに立ち戻ってもう一回考え直したらいいのか、立ち戻るところがなくなっちゃうのです。どんなに準備を周到にやったとしても、うまくいかないことって人生誰にでもあるわけで、うまくいかないからそれでアウトということではもちろんありません。**うまくいかなかった経験を糧に、もう一度自分で考え直して次の決断をする**と、**実はずっと強く先に進めるということもある**わけですから、順調にいかないとかだめだということでもありません。でも、どうしてこんなことになっちゃったのかということが子どもにも親にもわからないような状態で、考えるべき情報が得られず、とるべき方法とが考えられないという事態は、何とか避けたいことです。

「日本人モデル」で考えてよいか、適切なアドバイスができるのは誰か

多分ここにいらっしゃる方の多数がそうだと思いますけれど、日本国籍であるとか、日本語が母語であるとか、あるいは日本文化だけで育ってきたというような人は、「人生のコースはこうなっている」ということを自分なりに振り返って考えることができます。ただそのモデルというのは、あくまでも単言語・単文化の人のもので、そうではない**複数の言語・文化が背景にある子どものライフコースを、日本語・日本文化の日本人モデルに当てはめていいかどうか**ということには、当然、疑問があるわけです。そうだとすると、ライフコースにおいて、日本人が普通にするって行くところですよという情報はもちろんあっていいと思いますけれど、同時に複数言語文化の人への適切なアドバイスとしては、恐

参加者
アンケートより

- 「日本語」のみならず、子どもをとりまく生活習慣や常識、あいさつ、他の親子との交流のしかた(けんかしたとき、一緒に遊びたいとき)を知ることも必要だと感じています。
- 教える方としては、どうしたらよいかヒントが得られ、悩みも知れて、これからの参考になる資料もよかった。

らく、そういう壁と格闘しながら進んでいった先輩たちの話が、どれほどプラスになるのかということ。それだって多様ですから、「こうなりますよ」という話ではないわけですが、でも進んでいく上でこういう障害があったとか、あるいは逆に複言語・複文化であるからこそ、日本語話者の私たちには見えなかった選択肢が、こういうところがあるよというふうに見えることもあります。ライフコースを考えようとする、

実は支援者が日本人の側だけであるということは、彼らの可能性を狭めてしまうということにつながるかもしれないと思います。そのあたりを考えると、やっぱりサポート体制をどう考えるかということに関して、考えるべきことがあると思われま



人間の基礎、言葉の基礎をつくる

子どもの成長・発達 ことばの発達とともにある

私自身はふだん、どちらかと言葉の問題を中心に考えることが多いのですが、子育てに関して今日考えようとしている問題は、複数の言語文化が背景にあるということで、言葉に関する選択肢がある方たちだということです。言葉というのは実はただの道具ではなくて、人をつくっていくという非常に重要な要素です。子どもが成長・発達していくということは、単に体が大きくなるというだけではなく、知能とかいろんな面が成長していきますけれど、実はその全てが言葉とかかわっているということなのです。頭の発達・心の発達・体の発達それぞれは、実は言葉を切り離しては考えられないのです。

例えば、頭の発達で「考える」ということは、今、皆さんは考えるということをやっていると思いますけれど、考えるということ、言葉を使わずにやれと言われてたら絶対にできません。何となくぼわんとしたイメージでいるときには、ぼわんとした言葉でいいですけれども、突き

詰めて考えようとか、何かおかしいと感じて何がおかしいのかちゃんと考えようと思った瞬間に、きっちりとした言葉が必要になってきます。その言葉の獲得が浅いと、考え自体も育たないという、まさに認知力の発達に関わってきます。学んだり、深く考えたりということをするためには、それができる言葉の力を獲得できているかどうかは大事です。

それから、豊かな気持ち、豊かな心を育てるということも、言葉と深く関係します。人とかわるることの中で、自分の気持ちが相手に全然伝わっていないとか、自分はいいやと思ってやったことに対して相手がそれをすごく不愉快に思ったりという、相手と自分の意識や感情の齟齬があったときに、「何で？」と思うことをお互いにわかり合うためには、やっぱり言葉で説明しない限り、顔を見ていて相手の気持ちがわかるということは、そんなに多くないですね。

言葉が発達して、ほかの人とうまくコミュニケーションができるようになり、相手の気持ちが理解できて、自分の心の状態も相手に説明で

参加者 アンケートより

- わかっていたようないなかったような学齢期の問題が明確になりました。自動的に学年が上がることへの誤解、得意な言語をベースに子育てをすることが大事。先々の見通しが立たない等々、サポート側が理解しなければならないことが分かりました。

きるということがずっと積み重なって行って、初めて、人の気持ちをちゃんと酌み取るとか、あるいは自分の心をコントロールするということができるようになってきます。そして実は、体の発達も言葉といろいろ関係があります。

このように人が育つということは、言葉が育つことと**いつも絡み合っていて**、言葉が育つから頭や心や体が育つ。頭や心や体が育つから、もっと人とかかわれて、もっと深い経験ができて言葉も育つというふうに、いつも**縄をなうようにお互いが育っていく**という感じです。

■ 親が自信をもって使えることばで子育てをする

そのことを考えると、乳幼児期に一番初めの言葉を提供する親が、生まれたときから子どもに**できるだけ豊かに言葉がけをして、言葉と一緒にいろんな経験をさせる**ということを積み重ねていくことが**何より大事**です。それがないと、子どもにとって心やことばが育つ大事な時間が空白になっちゃうわけですね。その言葉がけがしっかりできることがとても大事だということは、つまり親が、**自分が一番自信のある言葉で子どもにたっぷり話しかけるようにする**ということです。親自身がこの言葉では何かうまく伝えられないと思うような、自信のない言葉で子育てをするというのは、親のストレスにもなるし、子どもにとっても豊かな言葉に触れて十分に力を伸ばすチャンスを失うことになります。「日本社会だから早く日本語を」という気持ちは、親自身にもあるのかもしれませんが、自分も日本語が不自由で苦労しているから、子どもにはその苦労をさせたくないという思いがあるかもしれませんが、日本社会にいれば、1人で遊びに出られるようになったら、日本語に接触

するチャンスは山のようにあるのです。元となる力が育っていれば、そうなったところで幾らでも取り返せます。でも、親とだけ接している時期に**家庭の中で十分な言葉の育ちがないと、外の世界で相手とかかわる力が弱く、得られる経験や言葉も薄くなってしま**うのです。言葉で深く考えると、気持ちを表現するということを親子で十分にやっていない状態のまま学齢期になると、学校において集団で学ぶ環境になり、一人ひとりに向けた言葉がけでない大量の言葉を浴びて行動したり、学習したりすることになった時に、非常に苦労してしまうということが起こるのです。

小学校の3~4年生ぐらいまで自国でしっかり勉強してから日本に移動してきた子は、初めはすごく言葉で苦労しますが、日本語がある程度できるようになると徐々に巻き返してぐっと伸びるということがよく見られます。一方、日本生まれ・日本育ちで、家庭の中でも日本語で通した子どもの中で、日本語の会話は一見べらべらなんだけれども、小学校の途中まで行ったところで言葉の問題に気がつくという例が、実は深刻な問題として認識されつつあります。そこはぜひ考えていただきたいことです。

■ コミュニケーション、そしてじっくり考えることばの活動

とにかく、親は親として十分にかかわり、周りの友達、周りの大人たちなど、様々な人たちと子どもが意味のあるやりとりをして、子どもが興味を持って、これはおもしろいからもっとやりたい、もっと知りたいという活動をたくさんやって言葉に触れるという、そのことが子どもの力を育てていくことになります。**コミュニケーションがたくさんあれば、子どもは言葉のやりとりを通してコミュ**

参加者アンケートより

- 親が自由に使えることばで子育てする大切さがよく分かりました。誰かに伝えたい気分です。
- (日本語支援・子育て支援)これらはぜひセットですることのメリットがあると感じました。親が一番深く使える言葉で幼児に接することが大事、に感動。

ニケーション能力をあっという間に獲得します。でもそれだけじゃなく、じっくりと考えるというような、そういう言葉の活動が家の中でも豊かであるようにということを考えると、親が日本語で深く、しっかり考えを表現することが難しければ、親自身の得意な言葉を使ったほうがいいといえます。もちろん、日本語の力が非常に高ければ、日本語を選ぶということも当然あっていいと思います。それは他人が決めることではなく、親

自身の選択ですけれど、**大事なことは、親が自信を持てる言葉で子どもを育てる**ということです。



「地域ぐるみ」の必要性

個別に捉えた問題は、実は相互に関係している

今までお話ししてきたように、海外から移動してきた方たちは、例えば自分の幼なじみとか学校時代の同級生とか、いろんなことを相談したり打ち明けたりできる関係、あるいは自分の親とか兄弟とか親戚、そういう人たちと、最近はSNSなどもありますが、やっぱり**対面で自分たちのこの表情・この状況を見てアドバイスしてくれるという関係**が、日本では少ないわけですね。そういうところで、**人的リソースが不足**しているということがあります。それから、日本語が圧倒的な社会ですから、**よほど日本語力が高くない限りは、情報も不足**します。それは単に言葉の問題だけじゃありません。情報を探すというのは「こういう情報があるはずだ」というふうに思えるから探すわけで、自分の出身の国にはそういう情報はない、どこを探してもそんなものは提供されていないという環境で大人になった人は、日本でもあるとは思わないから探そうとしないし、探そうとしないから見つからないということがあつたのです。**社会**

文化の枠組みによって、情報にも壁ができてしまっています。それをカバーしていくためには、個人の努力に任せるのではなく、やはり**地域全体で意識**していく必要があります。

今まで挙げた**それぞれの問題は実は相互に関係があつて、一個一個ばらばらに対応したら解決できるという問題ではない**のです。これを解決しようと思ったら、別のことを解決しなきゃいけない、それをやるためには、この人たちの手を借りなければいけないと、ぐるぐる回つてつながっているのです。

地域形成の問題としてとらえる

そう考えていくと、やっぱり**地域環境の全体としての取組み、対応が必要**です。横浜の中でも、区によって環境がすごく違いますよね。一つの市であっても同じことをやったら同じような成果が上がるというわけでは全くないということは、私も横浜で学びました。そういう状況の中で、地域に即して考えていくということをぜひやっていく必要があります。地域環境にはさまざまな違

参加者アンケートより

- 基調講演は、「親が自信を持って使えることばで子育てをする」が中核と思えた。論理的な話の組み立てで分かりやすい。
- 外国人親子に対する「防災」←地域とのつながりも重要

いがあり、県や市、区など行政区によって違う社会制度とか政策など個人のレベルで対応できないことがいろいろありますから、それは当然その地域の問題として取り組むことになると思います。子育ての問題にかかわることは、地域社会をつくっていくことであり、**地域社会の一員である子どもが豊かに育つ社会をつくるという、まさに地域形成の問題**です。

この社会で育っていく子どもが、国籍だとか人種だとか言語だとか文化だとかの違いによって幸せになれないとすると、それは社会の問題が根本にあります。この社会が健全で豊かな社会かどうかというのは、**子どもたちがどう育っているかということを見れば、多分それが一番の鏡**になるんじゃないかと思います。以上です。(拍手)



参加者
アンケートより

- 語学の習得の場づくり、先輩母経験者からの話。検討します。
- 県外に手厚い多文化子育て支援をしている地域もあります。大都市としての戦略を意識していきたいと思います。

2 調査報告

「就学前の子どもと親の支援に関する取組調査報告」

公益財団法人横浜市国際交流協会 藤井 美香

こんにちは。YOKEの藤井と申します。皆様のお手元に、調査報告書をお渡ししているのですが、これを10分間でご紹介するというので、ちょっと飛ばしてお話しいたします。

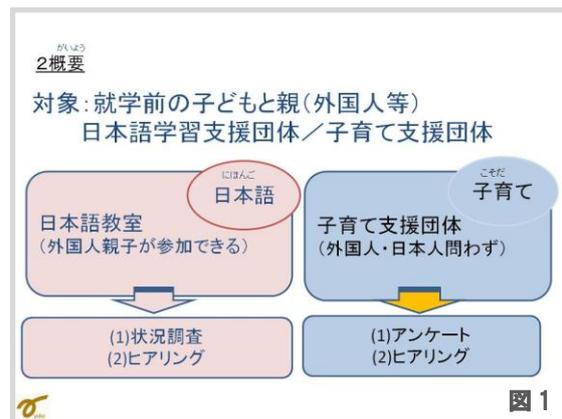
今回の調査に関しましては、本当に多くの方にご協力をいただきましたので、まずはこの場をおかりしてお礼を申し上げたいと思います。これからの報告は、この調査の「背景」「内容」「結果」そして「見えてきたこと」の順番でお話をしたいと思います。

取組調査の背景

今回の調査の背景に当たることは、「横浜市外国人意識調査」の中で、困っていることや心配なこととして、「日本語の不自由さ」ということが外国人の声として挙げられています。また特に子育て中の方からは、「子どもを連れて通える日本語教室がない、または少ない」ですとか、それから「子育てに関する情報がない・見られない」、「外とのつながりが持てない」というような声がありました。

調査の内容

今回の調査は、日本語学習支援分野と子育て支援分野の連携が図れるのではないかとということで、まずは横浜地域の関連団体の取り組みなどを知るために、関連団体への調査、日本語学習支援にかかわるニーズの状況調査を行うことにいた



しました。横浜市の委託を受けてYOKEが実施し、2014年の5月から12月の間に行っております。

今回対象としているのは、外国籍または外国につながる就学前の子どもと親で、その方たちが通える日本語学習支援団体・子育て支援団体の両方を対象としました(図1)。左側の「日本語」は、外国人、特に外国人親子を対象とした日本語教室で、状況調査とヒアリング調査を行いました。ま

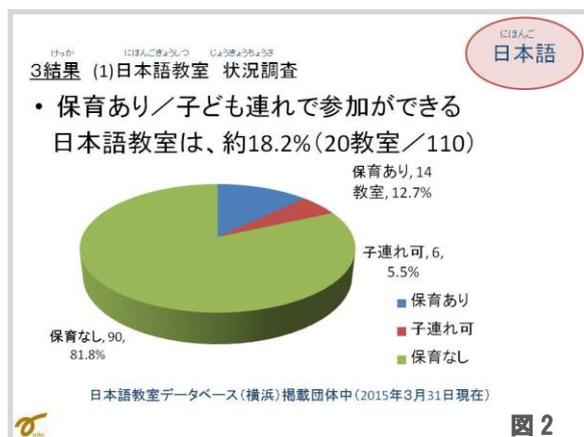
参加者
アンケートより

- こういう調査、講演会があつても横浜市は体制が組まれていて安心しました。
- トータルで夫々の支援団体の情報を紹介出来るシステムが欲しいですね。NETなどで。

た右側「子育て」の側面からは、外国人・日本人を問わず、親子が参加できる子育て支援団体を取り上げまして、アンケート調査及びヒアリング調査を行っています。

結果：日本語学習支援の状況

次からが結果です。「日本語」「子育て」、それぞれについて申し上げたいと思います。まず、日本語教室の状況です。YOKEでは日本語教室データベースを公開していきまして、年に1回更新しています。今、110教室の登録がありますが、そのうち保育があったり、子ども連れで参加できる日本語教室は、約18.2%の20教室ありました（図2）。横浜市内には、実はほかにも日本語教室が随分あるようなんですけども、公開してもいいという教室に限って、この110教室という数を出しております。



そして、その日本語教室の中から、9団体について、ヒアリング調査を行いました。6団体が横浜市内、3団体は横浜市内外の団体です。さまざまな形態の日本語教室がありました。「保育あり・子連れ可と、親を対象とした日本語教室」、また「親子を対象とした日本語教室」です。

そこから見えてきたことなのですが、保育のあ

る日本語教室のうち、全くの別室保育ですと、親は学習中は学習に集中できて子育てのストレス解消の時間にもなっている、また同室保育の場合は、同じ部屋の中に保育の場所と勉強の場所がありますので、お互いの姿がわかって安心ということでした。

「保育ありの教室」といいますと、まず保育スタッフの確保が必要です。また場所の確保、それから子どもに対する安全面での配慮など、さまざまな配慮・工夫がされていました。

「子連れ可」の日本語教室は自己責任でということ、お子さん連れで参加できる教室が多いです。先ほどの統計では6教室というふうに出ましたが、実態としては、子連れ可の教室はもっともっと多いと思います。お話を伺っていて、表向きには子連れ可にはできないというご事情を聞きました。なぜかといいますと、結果として学習者の希望に応じて受け入れはするんですけども、安全な環境を提供することができないとか、ほかの学習者に対して迷惑になってしまうのではないかなどと教室側が考えて、子連れ可ということを表に出せないということなのです。

「親子対象の日本語教室」ですが、こちらは初めから親子を視野に入れたプログラムが組まれていまして、生活や子育てをテーマとした学習や子育て情報の交換、また親子が一緒に遊びを体験したりなど、親子で一緒に過ごす時間を大事にしています。

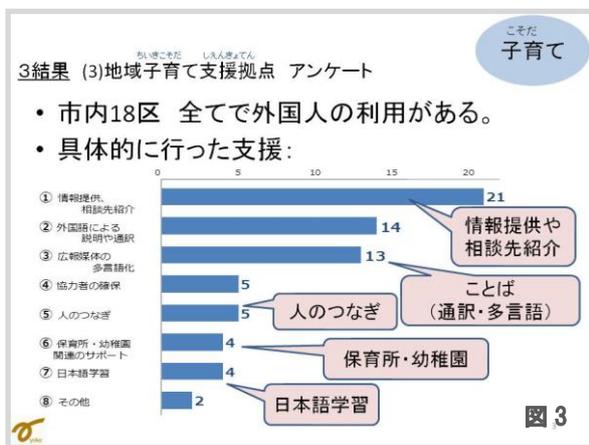
結果：子育て支援の状況

次に、子育ての団体についてです。今回は、横浜市にある地域子育て支援拠点に対してアンケート調査を行っています。外国人・日本人を問わず親子が参加できる場として、地域子育て支援拠点

参加者アンケートより

- 子育て支援センターや託児付日本語教室が大きな可能性を持っていると思う。YOKEのコーディネートに期待しています。
- 貧困の家庭、昼間働いている方たちも参加できる、きめ細かい支援があるとよい。

は、今、横浜市内全18区に1つずつありまして、子育て支援の地域拠点となっています。結果として、市内18区全てで、外国人の利用があり、また18区中17の施設で「外国人に対して特別の支援が必要だと感じている」という回答があります。



具体的に行った支援について、グラフで示しています（図3）。多いところから挙げますと、「子育てなどに関する情報提供や相談先に紹介」、また言葉の問題では、「通訳」であったり「多言語情報・多言語資料の提供」、人のつながりでは、「**同国人・日本人を問わない友達づくり**」などです。また保育所や幼稚園の情報ですとか、日本語学習についての要望などに対応しているという声もありました。

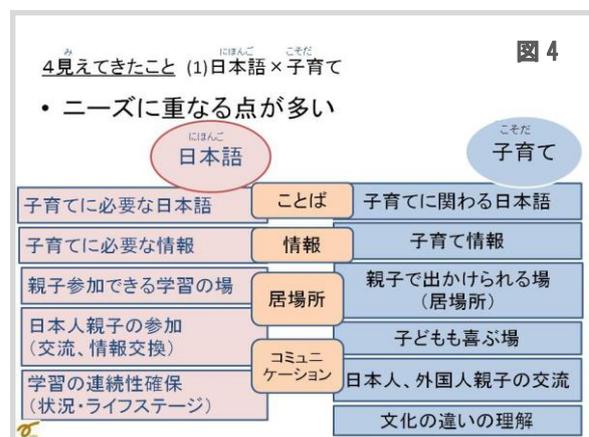
また、子育て支援の団体の中から、**4団体にヒアリング**を行いました。保育園での日本語教室、それから子育て支援を目的とした団体、地域子育て支援拠点の3つです。いずれの施設も子育てを目的とした場ですので、子どもに配慮した**安全・安心な環境**がありました。また、**子育て情報が得られる**ということもメリットです。加えて、外国人・日本人を問わず親子が集まる場ですので、日本人親子との交流の場でもあるんですけども、**仕掛けがないと、なかなか自然に出会いや交流が**

参加者アンケートより

- 「やさしい日本語」の重要性をもっと市民に広める必要を感じる。区によって温度差がある（在住外国人数によるもの？）ので、区で、もっと講演会や研修など行ってほしい。
- 多様なサポートの場があることを知り、勉強になった。

進むわけではないという状況も見えてきました。そのために、例えば**異文化を意識した交流プラン**をつくったり、**外国人当事者で言葉のできる方をスタッフ側に巻き込んだり**と、さまざまな工夫がされていました。

外国人の参加について、日本語ができないと参加しにくいという面が実際のところはありません。例えば子どもに外国語で話しかけているのを聞くと、日本人の親がなかなかその人に話しかけていかないとかがあります。一方で、キーパーソンが利用者になれば、交流が進むというようなお話も伺いました。



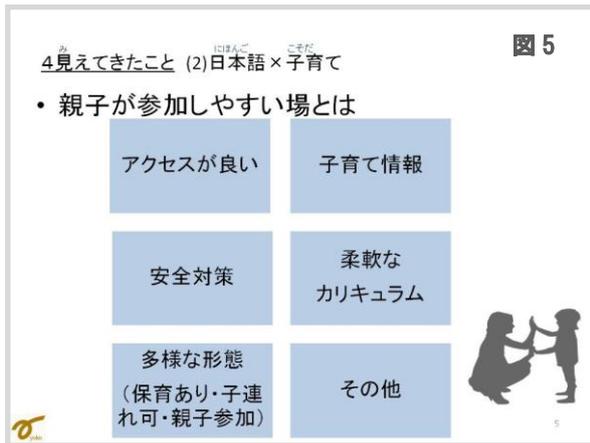
調査から見えてきたこと

以上のことから見えてきたことを、3点申し上げます。

1つ目は、

日本語の側と子育ての側から見て、ニーズに重なる部分が多かった

ということです（図4）。子育てに必要な日本語に対するニーズ、また子育てに必要な情報に対するニーズ、居場所としての場、そして人との交流・コミュニケーションです。言葉・情報・居場所・交流の場ということに対する共通したニーズがありました。



2つ目です。では、

親子が参加しやすい場とはどのようなところなのか

ということを考えてみましたが、このようなものが挙げられるかと思えます(図5)。「**通うのにアクセスがよく、子育ての情報が得られて、安全なところ**」。また「**柔軟なカリキュラム**」というのは、子どもと一緒に参加ができるとか、続けて通えなくてもちゅうちょせずに参加できるとか、それから、状況に応じて休んだり遅れたりということの連絡がとりやすいなどです。また「**多様な形態**」としては、保育の形態や、親子参加などさまざまな側面があって、親子が自分の状況に合わせて選べるということが大事なのではないかと思っています。最後です。

異なる分野とのつながり・連携の可能性

ということで申し上げたいと思います(図6)。

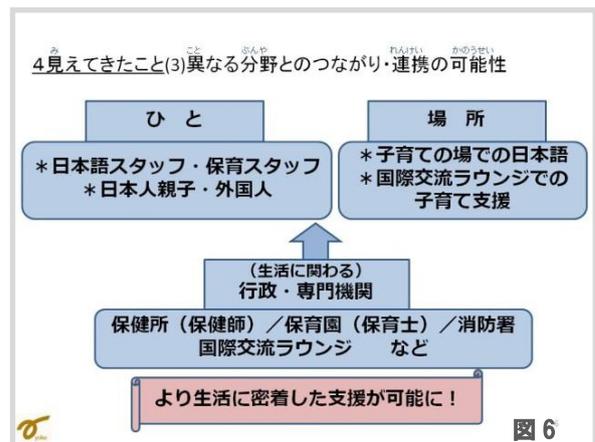
まず支援者については、**日本語のボランティアやスタッフだけではなく、保育のスタッフとの連携**もできるのではないかと思います。その担い手も日本人だけではなく、例えば、同じ子育て世代の親子であったり、また外国人の方であったりという可

参加者アンケートより

- 行政窓口にはもっとがんばって頂きたいです。「目に見える多言語支援」をして頂きたいです。各ラウンジでも子育て世代への支援に取りこんで頂きたいです。
- 様々な場での取り組みが参考になりました。

能性があります。場所についても、利用のしやすさ・多彩なプログラムにつながるということで、例えば**子育ての場での日本語学習の場であったり、国際交流ラウンジの中で子育て支援のプログラムを行ったり**と既に連携はあるんですけども、いろいろな可能性が見えてきたと思います。

そして**生活にかかわる行政・専門機関との連携**について、最後に申し上げたいと思います。幾つかの団体では、既に生活にかかわる情報提供などで、保健師・保育士・消防署などの方を呼んだプログラムを行っていました。具体的な情報のやりとりだけではなく、直接、外国人親子と行政の担当者が接点をつくることでニーズの把握にもなりますし、何よりも生活に密着した支援が可能になります。またその場自体が、多文化コミュニケーションの場としても活用できるのではないのでしょうか。



私の報告は以上なのですが、地域での具体的な取り組みや可能性については、第2部のパネルディスカッションにつなぎたいと思います。ありがとうございました。(拍手)

第2部 現場からの取組報告・パネルディスカッション

「外国人親子の日本語学習支援・子育て支援事情」

コーディネーター：唐木澤みどりさん（早稲田大学大学院日本語教育研究科博士後期課程）

○司会

第2部の進行は、唐木澤みどりさんをお願いしております。唐木澤さんは、昨年度の当協会日本語学習コーディネーターとして、この調査に深く関わりました。それでは唐木澤さん、よろしくお願いします。

○唐木澤

第2部のコーディネーターとして、進行を担当する唐木澤みどりと申します。どうぞよろしくお願いします。

私は、以前から小中学生の子どもたちへの日本語支援をしていて、小学校に入る前からの子どものことばの育ちや、親子を含めた支援の必要性を実感していました。昨年度横浜市国際交流協会で外国人親子支援の実態を調査するというので、非常に意義のあることだと思いましたし、調査に関わることができ私自身もたくさん勉強させていただきました。またこのような報告会という形で、関わる皆さんが一堂に会し、日本語支援、子育て支援に関わる方や子育て経験のある外国人当事者の方の生の声を聞き、意見交換ができるのは、非常に貴重な機会だと思います。

第2部では、日本語支援、子育て支援、そして子育て経験のある外国人当事者、計4名の方に、それぞれの場での具体的な状況や取組をお話いただき、私たちが現状を知り、関わる人の思いを共有したうえで、外国人親子支援のために何ができるのかを参加者のみなさんと考えていきたいと思っています。

パネリスト

ハンナの会 日本語学習支援

川口 世津子 さん

横浜市北上飯田保育園 子育て支援の場での日本語支援

本間 深雪 さん

港北区地域子育て支援拠点 だろっぷ 子育て支援

原 美紀 さん

濱崎 杏莉 さん
フィリピン出身・保育園勤務 外国出身の保護者



ハンナの会 日本語学習支援

川口 世津子 さん



皆さん、こんにちは。ご紹介にあずかりました、ハンナの会の川口と申します。ハンナの会というのは、都筑区のつづきMYプラザ、**都筑多文化・青少年交流プラザ**というところで、**毎週金曜日の午前中に、日本語の会話を中心に教えているグループ**です。

学習者の人数は時期によって異なりますけれども、現在は10～15、16人で、ボランティアだけで24人、子どもさんを連れてくる学習者は3組ほどおります。**保育はなくて、子どもを同室で遊ばせながら日本語を学習**しています。一時期は、保育ボランティアをお願いして、時間中に同室で保育をしていたときもあったんですけども、学習者は毎回出席するということがなく、子どもが来ないことも多かったんです。保育ボランティアが転居したこともあって、現在では保育がなく、学習者の方の横で、親御さんが子どもを遊ばせながら学習するという形にしています。

親御さんが学習中の子どもさんは、机の横にマットを敷き、子どもが遊べるスペースを作っているため、そこで遊びます。それでマットとおもちゃを用意しています。ちょっと時間がかかるんですけども、何で遊ぶのか一生懸命迷っているところです（写真）。



年齢にもよりますが、子どもさんは学習者の横でおもちゃで遊んだり、絵を描いたりして待っています。飲食ができる部屋なので、お水を飲んだり、おやつを食べたりすることもあります。



子どもさんが横にいて、親である学習者が日本語をどのように勉強しているかという点、その方の日本語のレベルや生活背景、例えば配偶者が日本人であるのかとか、日本に短期滞在なのか長期滞在なのかなど、また、子どもさんの年齢でいろいろです。子どもさんが横でぐずっているのを抱きかかえながら、ボランティアの言葉を聞き逃さないようにメモをしている学習者さんがいたり、逆に子どものことで集中力が切れてしまったり、トイレで中断したり。子どものトイレというのはくせ者で、2時間教えている間に5～6回行くことがあります。子どもが「トイレ」といったらもう仕方がないんですけども。それで、**ボランティアも学習者の方の状況に応じて教えていく**という形になっています。

会話中心の教室なので、**会話の場面設定が学習者にとっても合わせやすい**です。例えば、子どもを連れて公園などの遊び場に連れて行ったときに、

どのような会話をするか、ほかの日本人の方にどのような話しかけをするかということで、話しかけた場合や話しかけられた場合だとか、その会話の場面設定を作ることができます。これは学習者によく質問されるんですけど、会話の終わり方です。どのようにして会話を終わったらいいのか。「じゃあまたね」という言葉で終わればいいんですけども、子どもがどこかに遊びに行ってしまうと、話の途中で相手のお母さんがいなくなって、このまま話が終わってどこかに行っていいのだろうか、あの話はどうしたらいいのだろうかととても迷います。そういう**それぞれの状況で困ったことをボランティアと一緒に考えたり、ボランティアが相談に乗ったり、受け答えを教えたり**することがあります。「じゃあお先に失礼します」とひとこと言えばそれで済みますよと言ったら、学習者がにっこりしたという経験もあります。

それと子どもの年齢によって言葉が違います。以前、グループで子どもの行動に差があるというので、言葉を年齢別で研究したことがあるんですけども、幼児期には人見知りとか、むずかる、ぐずる、あやすという言葉があります。あとは寝返り、はいはいをする、つたい歩き、つかまり立ちなどですが、これは、ほとんど日本語のテキストにはありません。むずかる・ぐずる・あやすというのは、子どもがぐずっている状況を見せるのが一番わかりやすいので、「ほら、この状態ですよ」と言えば「ああ、わかります」となります。それで、**子どもがそばにいたほうが、かえって様子を見ながら日本語を学ぶことができます。**そしてボランティアが子どもに何げなく使う言葉などを、学習者は聞き逃さず「よく聞く言葉でしたけれど、意味がわからなかったんです」ということが多くあります。**会話集にはない、町なかで聞く会話、それこそ生きた会話を学ぶことができます。**

では子どもが同室にいて、ほかの学習者に迷惑をかけているかということ、どのグループも自由会話をしているにぎやかなので、余りに気にはしませ

ん。子どもが学習者の机に乗ったりすることもあるんですけども、子どもさんが来たことでなごんだり、またそのことを話題にするということもあります。

学習者の中には、学習中に結婚・出産を経験する方がいらっしゃいます。結婚のときには結婚の話題、出産のときには、日本の病院で治療を受けた場合、そのときの語彙・会話、これは港南国際交流ラウンジさんで作られた「日本で安心して赤ちゃんを」というテキストです。これを使わせていただいています。それで、**日常生活に困らないような会話の練習**をしています。学習者が、出産などで一時期教室に通えなくなることがあるんですけども、子ども連れで外出できるようになると、また通い出す生徒さんもいらっしゃいます。授乳のときには、あいている部屋で授乳させていただいたり、施設が入っている、商業施設の授乳室に行ったりします。

離乳食の話が出たときなどは、もう私たちは今の離乳食の話はできないので、一緒に書店に行って、こういう本がありますというのを紹介したりします。あと、子どもの遊び場を知らないときには、学習者の家の近くの公園や子育て支援センターやいろいろな子育てサークルを紹介したりしています。

また、日本語を文法から学びたいという方には、同じつづきMYプラザで活動している**別の日本語教室を紹介**して、学習者は、いろいろなグループをかけ持ちするというをしています。子どもが退屈したり、食事などで終了時間前に帰宅することがあったり、集中できない場合もありますけれども、それでも続けて来る生徒さんもいらっしゃいます。やはり日本語の学習で得られることもあるんでしょうけれども、彼女にとっての**居場所**になっているのではないかと思います。

以上、ハンナの会からの紹介でした。(拍手)

横浜市北上飯田保育園 **子育て支援の場での日本語支援**

本間 深雪 さん



横浜市泉区にあります、北上飯田保育園園長の本間です。よろしくお願いいたします。

この地域は、かなり特別な地域でして、泉区と大和市にまたがって、県営のいちょう団地があります。この団地は、**外国人の方々が6割ぐらい居住している地域**です。多文化まちづくり工房を含め、多くの支援者の方々が関わっている**多文化共生の地域**になっています。そこに隣接しているのが、うちの北上飯田保育園です。

保育園の国籍別児童は、中国・ベトナム・バンラデシュ・ラオス・カンボジア・タイ・フィリピン・ペルー・ブラジルで、今、日本は19%です。**中国・ベトナム・カンボジアが大体2割5分ずついて、日本人が2割**ということになっています。主な言語は、日本語・中国語・ベトナム語・カンボジア語です。先日の金曜日にも夏祭りがあったんですが、そのときに保護者への挨拶は、「こんにちは」だけでも9カ国語になりました。**日本でありながら多くの文化が混在する保育園**ということなんです。横浜市の中でも、ちょっと特色のあり過ぎる保育園なんですけれども、その中の子育てサロンということでお話をさせていただきます。



子育てサロンというのは、**保育の場所での親子の居場所づくり**ということで始まっています。うちの保育園は平成19年4月に子育てサロンという形でやり始めましたけれども、地域柄もありまして、日本語教室も一緒に開始されました。子育て世帯が学べる場ということで日本人の家庭の方も参加して、日本語を学びながら国の子育て事情や、おやつを紹介等、サロンとして活動していました。

最初のころのチラシでは、「子育てサロンに遊びにきませんか？」という、主にサロンの紹介で、下の方に「日本語教室やっています！」ということで、まだまだサロンのほうが重点になっていました。このサロンは子育ての方がどんどん大きくなっていったり、あとは東日本大震災で地方に行かれたり母国に帰られたりして、少しサロン自体の人が少なくなって、「きょうはサロンをやっています」と教えないとなかなかいっしょにならないということになり、日本語の教室の比重が大きくなってきました。

就職希望者が増加して、いわゆる待機児童解消のために、保育園も定員以上の人数を受け入れなきゃいけないということ、それからうちの保育園も、外国人の方や地域の方々もやはりどんどんと就職を希望していて、北上飯田保育園は**現在定員の140%の利用率**を誇って、誇るものでもないんですけど、利用率となっています。

最近の子育てサロンですけれども、やはり**仕事につきながら子育てをしている方が多い**です。日本語教室と子育て応援をあわせ持つスタイルに

なっていきたいということで、**言葉サポーター**の方々が日本語を教えます。今、会場にもお二人いらっしゃるんですけども。日本語を教えている間に、**保育士が保育のほうに参加しながら、乳幼児のいるお母さんがサロンで少しずつ言葉を覚えて、次の年に就職をして、子どもたちが保育園に入所できたらいい**など思っていますし、実際に何組かは、そういう流れができてきています。就職後もサロンに参加し続けていらっしゃる方もいます。また保護者の方も外国人の方が多いので、木曜日の午後は日本語教室をやっているんですか？ということで、サロンに参加したいですと希望される方、あとは送迎に来る祖父母の方も日本語を覚えたいと、参加される方もいらっしゃいます。現在のチラシにも、やはり「子育てサロンに来ませんか？」とありますけれども、**日本語を勉強したい人、日本のことをもっと知りたい方**ということで、毎週木曜日の2時から4時というチラシを配っています。

子育てサロンは保育所の中の一室を使っています。この間、夏祭りの夕涼み会があって、保育士が浴衣を持ってきたんですけども、サロンのほうでも七夕会ということで浴衣を着せてあげたりという場面もあります。日本語のところですけども、今言葉サポーターのお二人を紹介しましたがけれども、**地域見守りの保育士と言葉サポーターに教室を運営していただいて、保育園の保育士が保育を手伝っています。**母子分離ではなくて、同じお部屋の中で保育士と過ごしたり、ちょっと大きくなって親と離れられるようになれば、ほかの部屋に行ったりすることもできますし、保育園が昼寝中で、後半になって起きてきたときにかかわるときもあります。赤ちゃんの場合は、なかなかお母さんから離れないということもありますけれども、部屋自体は保育園の中ですので、**さまざまなおもちゃ等を用意することができます。**

サロンと保育園の関係なんですけれども、保育士が自分のスキルを活用してサロンに手伝いに

行ったり、うちの特殊な地域の理解をするためにサロンに参加することもあります。**地域育児支援の充実**を、サロンを通じて図っていきたいという保育園の思いがあり、また、サロンのほうでは**日本語の獲得や子育ての不安の解消**を図っています。あとは子育てサロンといいながらも日本語教室ということで、多くの子育てに関係ない方も参加して下さって、まさしく**地域の方のとの交流**にもなりますし、**サロンを通じて保育園ということを認識**していただいて、就職して保育所へ入所してもらおうというルートも、ある程度できてきていると思います。

今後のサロンの方向性として、**親子で学べるところ、かつ保育園とつながって**いられる子育てサロンでいたいと思っています。そこら辺が、いちよう団地の中のコミュニティでいろいろとある中でも、保育園とつながっていますよ、子どもと一緒にいいですよ、というところで、口コミの広がり期待しています。団地内のお祭りとかコミュニティで、言葉サポーターの方々がいろいろ宣伝活動をして下さったり、団地の中で「こういうのがあるからぜひ来てください」ということが、**口コミでどんどん広がってきている**かなという状況です。

私が最初に話をしましたとおり、多文化共生地域にある保育園ということで、ほかにはない保育園なんですけれど、入所している子だけじゃなくて、**地域に住んでいる多くの外国の方が日本社会で働いて、子育てができるようにサポート**していくということが、本保育園の使命だろうと、保育園の職員全体で思っています。日本の家庭と交流がつながって、その交流がつながる部分が保育園を起点とすれば多分一番いいんでしょうけれども、**交流してつながりが深まって地域に密着した子育て支援**というのが、このサロンを通じてできたらいいと思っています。

簡単ですけど、このようなことを実行しております。(拍手)

港北区地域子育て支援拠点 だろっぶ 子育て支援

原 美紀 さん



私は港北区の子育て支援拠点だろっぶというところで施設長をしております、原と申します。

地域子育て支援拠点は、平成17年から横浜市の中で1区に1カ所整備をしていくということで、最後は23年度に18区そろって運営しております。主に**未就学児の方々が親子で行く場所**なんですけど、横浜市在住の皆さんは地元の区に必ず1カ所はあるので、ぜひ行ってみてください。主に0、1、2、3歳ぐらいまでが多く、私がいる港北のだろっぶでも0-3歳児で7割から8割の利用になっています。主に幼稚園・保育園に入る前のお子さんたちと一緒に来るのは、土曜日はお父さん連れも来ますし、必ずしも親に限定しておらず、おじいちゃん・おばあちゃんが連れてきたり、具合の悪いときはお友達が連れてきたりと、本当に色々な利用があります。どこも**年間2万5000人から3万人ぐらいの利用者**があるという形で活動しています。

だろっぶは平成17年度にスタートしておりますので今年で10年目になるわけですが、この10年の中で、今回こういう機会をいただいて自分で俯瞰してみると、外国につながる家庭の方々のご利用というのは、本当に様々な流れがあったなと思っています。



今はどこの拠点でもとても活発に、外国の方々へのサポートをやっていらっしゃいますが、だろっぶができた当初1年目に、この分野の取り組みをだろっぶでスタートさせたということの原点は、最初に中国籍の方がいらしたときに、説明するツールがなくて、自分たち自身もすごく困ったということがありました。「利用要綱」という、これはどこの拠点にあると思いますが、初めて来た方に利用の仕方というものをお配りしていますが、これも今は、**3言語とやさしい日本語対応**でつくっています。あとは、なるべく、どなたでもどうぞということで「ようこそ!」というような**ウエルカムボード**を作ったり、本当に誰にでも開かれているよというメッセージの意味で、最初の一步はとても勇気が要るだろうということで、こういったツールづくりは、多言語をしゃべれる方々もたくさんいらっしゃるの、帰国子女の方もいますし、そういった協働に取り組みました。**当事者の先輩の方々からもご協力をいただいて、今もグループとして活動**を行っています。

直近では**お誘いカード**というのを作っています。名刺サイズで、薬剤薬局とか多国籍レストランとか、ありとあらゆるところに置いていたり、ボランティアさん、利用者さんにも常に持ってもらっていて、街角でこういう方を見たら配ってもらおうみたいなことで、カードのデザインも中身も全部、今、MSCとっているんですが、**多文化共生サポートクラブ**の方たちが作ってくれています。

1年目に中国籍のご家庭の方が来たときに、その方は、毎日来てくれていたんですけど、幼稚園に入るといったときの園選びに難航し、そこに

ずっと私たちも伴走していました。結局、色々なものが私たちには足りないんだということを、その方から教えてもらったという経験がありました。「列並び」と言われても何だかよくわからないし、今はもう子どもの分野では新制度が始まったので、**幼稚園・保育園に入園・入所するときの申請とかが、すごく複雑**になっています。このあたりで**園への不安**というのを持っている方がとても多くいらっしゃいます。知り合いのボランティアさんがいて助かるという方も、あとはシステムとして通訳派遣は使えるようにはなっていると思いますが、日常的なちょっとした困り感というのは、ちょっとしたことではないわけです。

今、港北区の幼稚園は、前の晩から並んだりするので、その願書をもらうのに順番待ちをするというのも外国の方にはわからないのです。その方はめでたく入ったのですが、入ったはいいものの今度は台風とかで警報があっても、園バスのバス停にずっと立っていたりとか、連絡が来ないとか、がありました。一つの家庭の、そういった、**スムーズに就園していく**というプロセスに、どう私たちが拠点として、先輩のお母さんたちの力を引き出すかというところで、今でもそういったサポートの必要性をととも感じています。

あとは結構お弁当に困るというのがあります。**ランチ交流会**を3~4年ぐらい前からずっとやってきました。お昼の時間に自分たちの国の郷土料理を持ってきて集まります。港北区の場合は外国の方がグループ・コミュニティをつくるという傾向ではないのかもしれませんが。地図で、どこの国かと教えてもらえないと、例えばプエルトリコとか、ロシアのウクライナとか、ちょっとぱっと見で地球儀ではどこだっけ？っていうところが多くて、最初にこうやって国のこと、私はここに住んでいますからという紹介をやって、日本のおにぎりのつくり方とかをみんなでやったりして、ずっと交流をしてきました。

やっぱり**母語で話せるということだけでもス**

トレスが解消されるということ、中国語でしゃべれる、ここでしゃべれたと、そういう時間を持つ、場所を貸すだけでも意味があるのかなと思っています。今は毎月の通信も英訳をして、やさしい日本語と英訳を区役所の戸籍課に置いてもらったり、国際交流ラウンジはもちろん、色々なところの生活の場面で置いてもらうということを意識していて、官庁・役所だけではなく、港北区にはモスクもあるので、そんなところにも置いてもらったりして、**広報にも力を入れて**やっています。

自分たちも作り出しながら、乳幼児家庭に向けた**多言語対応資源って結構あるんだ**ということ、そして一方で結構使われていないものもあるということに気づいたのです。例えば問診票とか説明書があつたりとか、やはりこういう**多言語資料を一元化しておく**というのはすごく大事ななと思ったりします。

あとは、10年経って見通すと、港北区は国別グループでこの国の方この国の方ってできない多様な人たちが、1人ずつ来るという形なので、この人っていう人が来たときに、その**困り感にどう対応できるか**という引き出しを持っていることが非常に大事ななと思って、日々過ごしています。子どもの育ち、発達のことをどう受け取るのか、夫婦間の相談のこととか、上がってきたりもするので、それぞれの国民性や文化を私たち自身が知ることにもなっています。石井先生のお話にも「異文化の子育てにとって価値観とか習慣を改めて意識するプロセスが大切だ」というお話があつたのですが、私たち拠点側の施設運営者も、様々な異文化の子育てに触れて、私たちに足りないものは何かということを、日々勉強させていただいているという次第です。(拍手)

濱崎 杏莉 さん 外国出身の保護者

フィリピン出身・保育園勤務



こんにちは。私はちょっと日本語がまだ十分じゃないので、見ていてください。お願いします。

私は自分が子どもを育てて、今考えたら本当に困ったなと思ったんだけど、でもそれは、私も対応をしたので、**あんまり自分が日本語をわからなくても、そのまま子どもたちを育てていました。**病院に行っても、そのときに通訳とかはあんまりなかったなと思います。病院とかも、やっぱりどこに行ってもそういうふうに、いったし。今は外国人のためのボランティアの方たちがいっぱいいますので、すごく**幸せな時代**だと思います。なんで私の時代は、あの人たちはいないなと思っていましたけど。

今、本当に、みんなは独学というんだけど、**自分だけで家で本を買って日本語を勉強**したんです。何でかという、いろんな、まあ、本当の日本語学校に行くのは利用料が高くてできなかったんです。ボランティア教室のほうへ行こうかなと考えたんですけど、でもちょっと、何回も行って、何カ所も行ったんだけど、そのボランティアの人たちの教えるスタイルは、ちょっと何か足りないものがある、じゃあ、時間がもったいなと思って、また家の中で勉強したんです。

本当は、自分で日本語をどうやって勉強すればいいのかわからなくて、でも自分もお金がないから、学校で高い学費を払うのももういいと思って。でもボランティアの人たちも一生懸命教えていると思うんですけど、どこか足りないんです。また何とか通じるけれど、でも私の日本語も

今でも必ずしも上手じゃないんです。どうしてかという**と正しい勉強のやり方というのを、教えてもらっていなかったかな**と思ったんです。

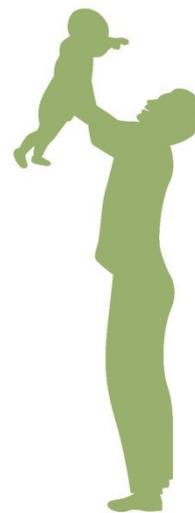
あとは、いろいろあるんだけど、多分日本語をどうやって直すのか、それを伝えたいけれど、でも自分がしたら、もうなかったの、言うか言わないかのことをどうすればいいのか。みんなの心は、多分日本人は、あんまりはっきり言えないところを、ほとんどの日本人はそう思ったんですけれど、でも私は元外国人だから、**言わないのは外国人のためにならないかな**と。せつかく子育てをやっている先生たちは、ちょっと、能力というのか、教え方はちょっと変わってほしいなと思っていました。私も一応、英語を教えているんですけど、もともと英語の講師じゃないので、でも、どうやって教えるのかは、セミナーとか研修とかに参加して、それで教えることはできましたので、多分、日本人は頭がいいというのでわかると思いますので、だからできればお互いに時間を無駄にしないように、外国人のために本当によくお願いします。

私の子育ての感想っていうのが、私はあんまり心配はなかったの、**小さいときは主人と一緒に**教えてもらったりとか、親とかと病院も一緒に行ったりしました。今は私の家族は3人の息子がいますので、今は家族が大きくなりましたので、孫もいますし。孫もいるのにまだ日本語がわからないの、本気で学校に通っていないので、すみません。

教育の、今、自分の英会話教室をつくったんです。英会話を教えたりで、ボランティアもやります。医療通訳をやってます。でもそんなに日本語がわからないのに、どうやって医療通訳をやっているのか。行く前にその病名を聞いて、そのことだけを調べます。だから、全部わからなくても、前もって調べて勉強していればできると思います。多分、日本語の先生たちも、教える前にきょうのテーマは何ですかって勉強すれば、正しい教え方ができると思います。今、保育園の子どもたちが大好きなので、子どもさんが来たら日本語を覚えないといけないから。

私の日本の経験はいろいろあるんだけど、日本人は優しいので、私が**日本語をわからなくてもみんなに教えてもらっています**。商店街の人たちとか、医療従事者の人たちとか、友達に助けてもらったりとか。私も**漢字がわからないから、そのままにはしないで隣の日本人に「これは何て読むんですか」**って、いつも聞くんです。これで今、日本に26年です。そうなんです。日本人たち

は、本当に私みたいな外国人に一生懸命教えたりみたいなので、本当にありがとうございました。ありがとうございました。(拍手)



取組報告へのコメント

○唐木澤

ありがとうございました。

それでは今の話を受けて、石井先生からコメントをいただけますでしょうか。

場の紹介と場を探すためのサポート、取組の共有の可能性

○石井

いろいろな豊かな良い事例が出てきて、それぞれの場で多様な取り組みが展開されているということ自体で、もう何か国境がつながったみたいだと思いますけれども、幾つか特徴的な取組としては、それぞれがそれぞれの可能性を、どうやって利用するかということ、どこも本当によくやっていたらいいということがよくわかってきました。同時に、そこに集まってくる人たちにも、自分に合ったものを見つけようというような動きが相当あることも見えました。ということは当然、**それぞれの場が違っている**ということの意味がすごく大きいということで、教室であるとか場を選ぶ人が、どうやって自分に合った場を見つけられるようになっていくか、むしろ**場を探すためのサポート**が、どうあるのかなということが一つの疑問として出ました。

それぞれの場に来てくれた人に対しては、非常に素晴らしい取り組みがあって、中にはそういうことを紹介しているという、例えば文法をきちんとやりたいっていう人にはそういう場があるという情報を提供しているというようにおっしゃったところもありました。一つの場にとりあえず行き着いた人に対しては、その人が相談してくれると、適切な場が紹介されるということが既にあると思います。けれども、もう少し地域全体として、何かこんなふうなことがしたいなってぼんやりとも思ったときに、例えばこういうことがあるよって情報が得られるような工夫がいるのでは。そこをつなぐことは、個別の活動をやっているところの仕事としてではなくて、もちろん、個々の場でもそこにたどり着いた人たちを、より適切なところにつなげるということもあると思うんですけども、**地域の中のシステムとしては、それは必要だ**ということです。それからどうしても必要なのは、**どのような場にもたどり着いていない人たちの問題**で、これは一番考える必要があると思います。

それから、多分個々の場が対応することで終わることじゃない問題ですが、さきほど取り組みの中で多言語のシートがつくられているというお話がありました。これは本当に難しい取り組みだと思います。例えば、いちよう団地という地域の、そういう環境の中でこの姿勢は当然必要なこととして進められているけれども、全体として見ると、**外国人の割合が少ない地域ほど、困った人が困ったまま、数として**

目立たないから解決されないでいるということで、これは全国どこでも似たような状況です。それを現場に全部任せていたという問題もきっとあると思いますから、これもやはり制度として整備していかなければならないことだと思います。どんな人でも、日本で生活していく人、子育てしていく人たちが、こういうものを活用できるようにする必要があるとか、これを見ないと困るというような資料とか、そういうものに関して、多言語化する作業は誰がやるのか。ちゃんと組織的な枠の中でやれば、いろんな場で共有できるルートもつくりやすいはずです。ぜひ一つ、もう既に幾つかのところまでできているものがあれば、そういうものを引き継いで広げていくということをやってもらったと同時に、せっかくできている**財産として、個別の取り組みをどう広げていくか**ということ、みんなで考える必要性があるかなということを感じました。

親が学んでいる姿を目にする子ども

それから、実際にお子さんたちを受け入れているというボランティアのところで、**親子を分けるかどうか**という問題があります。これは全国どこでもよく問題になってきていますが、それぞれの人が「学ぶ」ということをどういうことだと考えるか、どういう学び方をしたいかは人によって大分違います。きちんと机の前に座って教科書を広げてというやり方でよりよく学べると思っている人にとっては、子どもの存在というのは、多分うっとうしいだろうとかいろんなことがあるだろうと思われるので、そこは、複数の場がそれぞれ、自分たちの場はこういう活動をするところだということ、とりあえず示していくということ、一番初めに言ったような、**自分に合った場をご紹介します**ということだと思います。

きょうのご発表は両方とも分けずにやっているという団体でしたが、**親子が同じ部屋の中でという環境のとても大きい魅力**としては、いざというときにすぐに対応できるような、**親も子も安心**というところもあります。そして以前幼児期のお子さんのそういう事例のお話を伺ったときに、本当に衝撃だったのは、小さいころから子どもが、**親が学んでいる姿を目にする**ということの影響がどれぐらい大きいかということです。家の中で家事をやっている親の姿って、そんなに印象深くはないし、家庭の中だと、大抵、親と子では非常に具体的な物事だけをやりとりしますけれど、やっぱり学ぶということをやっている親を見ていた子どもが、学んでいる中身よりもまず学ぶという行為をまねしようとする。大人やお兄ちゃん、お姉ちゃんのまねをするということを子どもはよくやりますけれども、そういう形で**学ぶという行為**がいいことなんだという**認識を獲得**していった、そういうことから、幼稚園や小学

参加者
アンケートより

- 石井恵理子教授、親が学んでいる姿を見ることが、子どもが学ぶことの出発点になる。いい視点。
- 皆、夫々立場は全く違うが、目的とする所は同じと思えた。

校での活動にうまくつながっていくんだってという話をいろんなところで聞きます。単に日本語を学ぼうとする親にとってどうかということだけでなく、子どもが育っていくときに、そういう親の姿を見せられるということ自体に価値があるということ、きょうのお話からもそう感じました。

異文化子育て情報の発信が財産になる

最後ですけれど、非常に多様な魅力的な活動をやっていて、そこで得た日本文化以外の子育てのおもしろい取り組みとか、いいやり方とか、**異文化のそういった情報を日本人側に発信する機会**みたいなものがうまくつくれると、それはかなり魅力的なリソースになるのではないかという気がします。違うやり方でやっている人たちがなぜそういうやり方をしてるのか、そのやり方はその人たちの知恵や価値観と結びついているのです。そこがきちんと見えてくると、単に「私たちのやり方とは違う」でおしまいにならないで、そういうやり方のよさというのはこういうことなんだっていう気づきにつながる。多分、今、日本の社会の中でも、例えばいろいろな子育てグッズのようなものも含めて、日本の伝統的なものではない新しいやり方や物が輸入されたり、そういうことを、お母さんたちは結構自分でキャッチして知っていますよね。そういういろんなやり方に対して日本でも伝統的にやってきたことのよさと同時に、考えていなかった別のやり方も「あ、それはいいじゃない」ということで広がる。やっぱり**多様な人がそれぞれに持っている知識や経験の財産**が、試行錯誤で子育てしている日本の若いお母さんたちにとっても、すごく大きな財産になるという、それが多分、多文化の人たちと一緒にいて、生活が見えるということも魅力かなというふうに、お話を伺いながら、思いました。

○唐木澤

石井先生、ありがとうございます。今、石井先生から自分に合った場が見つけれられるか、それを探するためのサポートということや、既に資源がたくさんあるので、それをどうつなげたり広げていけるかというお話がありました。また日本語学習をする場合に親子を分けるかという問題は、もちろん親自身の学習の考え方にもよるけれども、親が学ぶ姿を子どもが見ることの大切さというようなお話がありました。また、ただ日本の文化を伝えるだけではなくて、皆さんが得た異文化の子育ての情報を発信するという点についてもお話がありました。

先生のお話や、またほかの方の発表を聞いて、パネリストの皆さんの何か感想とかコメントとかがあれば、それについて少しお話を伺えたらと思います。

親子で「あいうえお」学ぶ

○川口

ハンナの会の川口です。先生がおっしゃった、小さいころから親御さんが学んでいる姿を見せることも大切とおっしゃったことで、一つ思い出したのは、やはりお

母さんがいつも連れてくる幼稚園前の男の子のお子さんなんですけれども、そのお子さんが「あいうえお」の積み木で勉強していたのです。それで、お母さんは、まだ平仮名ができないんですけれども、子どもと遊びながら、それで最終的にお母さんは、ちょっと時間がかかって習得したんですけれど、**子どものほうが平仮名を覚えるのが早かったんです。それが彼にとってすごく自慢で、「ママ、これができるよ」というのを勉強している最中に、もうそのたびに見せ来るんですよ。それで彼は、今はもう小学校2年生で、お母さんは、もう日本語の勉強に来るよりもご家庭での自分の生活のほうに時間を割きたいということで、学習には来ないんですけれども、子どもが来たい、子どものほうが勉強をしに行きたいと言って、きょうは子どもの幼稚園が休みなんで、子どもと来ましたということが多くありました。**やはり**親が勉強している姿を見る**というところで、すごく印象に残ったことがありました。

母国の保育を大事にしてほしい

○本問

うちの保育園ですと、日本文化というよりもそれぞれの国の文化が多くあって、その中で子育てをしているというところで、日本でありながらそれぞれ、**親は自分が育った母国の保育をしよう**と。日本の保育とやっぱり大分違うところがある中で、どこまですり合わせるかというところがあります。保育園としては、日本の保育の大切さは伝えるけれど、親側を絶対に否定はしない。親が育ってきたその保育で子どもを育てるのは、もちろん一番大切なことだし、家庭で一番大切にしてほしいのは母国語であって、保育園では日本語が全てなんですけれども、**おうちでは母国語を大切にしてほしい、母国語の保育を大切にしてほしい**のです。

そこと日本の保育との差というのは、今、お弁当がありましたけれど、お弁当という認識であったり、おむつトレーニングという認識であったり、薄着の認識であったり、それは日々、もめるところではありますが、でもやはり**お母さん方はそこで育ってきたんだよね**というのは、保育士自身が絶対に忘れちゃいけないことだと思います。カンボジアだったらカンボジアの文化のすばらしいところというのが伝えていけたら、うちの保育園はとていいだろうなと思いますし、何よりうちの子たちは、**みんなが違って当たり前**なので、誰が外国人という意識は全くないですし、この子は中国語がしゃべれて、ベトナム語がしゃべれて、先生は日本語しかしゃべれないという感覚の子たちです。そしてサロンに来られる方も、もちろん日本語を習いたいというのがあるんだろうけれども、基本、自分たちの保育というのを、それを大切にしてほしいかなというのはあります。その中でやっぱり、その文化を

参加者
アンケートより

- 在住の外国人が支援の中心になり、次世代につながっていけると良いと思いました。
- 「〇〇してあげる」という上から目線にならないよう気を付けたい。
- 幅広い話が聞けてよかったです。

日本の人たちに伝えられたらいいだろうなというのは、これからのうちの保育園でしていきたいことです。

地域に理解者、応援者を増やす

○原

港北区って転出入率が市内でトップなんですけれど、転出する人も多いので、その中には当然海外に行く人もすごく多いんです。この間、ドイツに行く人がいて、ドイツ人のお母さんにいろんなことを聞いたりとかして、そういう**相互の、向こうの子育て文化を聞く**みたいなのがあります。そういう意味では、拠点みたいな場所は本当に多様な方々が来るので、結節点になるという、その役割が大事だろうとか、あとは**さっきの場を探すためのサポート**というのもすごく大事だと思っています。**様々な資源がここにあるよ**ということ、**方々に普及させていく**という役割も大事だし、あとは「そこに行ってみたら？」と。

この間、ロングバケーションという感覚がない地域の支援者の方が「回覧板が届かなくなっちゃって、いなくなっちゃった」みたいにすごく心配をしていました。でもその人はいつも3週間とか1カ月ぐらい帰っちゃうから大丈夫よね。でも災害のとき、そのときはどうするのとか、そういう相談が来たりします。あとは逆に、この間はお盆のときで病院が1週間休みだと、保育園を休んでいた子が病院から登園許可書をもらえなくて保育園に行けないということが外国につながる方はわからなくて、どろっぶのある通りは病院通りでもあって小児科がたくさんあるのですが、幾つも回って右往左往している方がいました。細かな手続き的なことが理解できないところも、双方でもっと歩み寄ったほうがいいかなということもすごくわかりました。一つ一つは本当にちょっとしたことなのだけど、やっぱり大変なことだなと思っています。

お互いの困り感とか、**情報を欲しい**みたいなことを少し、**ここだったらあるよ**と言ってあげられる、**そういうものを持つ**ということが大事だなと思っています。だからプログラムでつなぐというのはもちろんなんですけれど、ひいては、その方が暮らしの中で幼稚園に入ったり学校に行ったりする中で、外国の家庭の方を知っているという人をやっぱり増やしていくという、**理解者や応援者を増やしていく**ということも、すごく大事にしていかなければと思っています。

これはついこの間、7月だったんですけど、先ほど言った**幼稚園・保育園の説明会**というのをやったのですが、資料は全部、翻訳者が、MSCの人たちがつくったのです。すごくページ数があるので全部はお見せできないんですけど、1回目のプログラムをやった日というのは、人がそんなに多くなかったのですが、それをやったことで、ここに行けばこういうのがあるということを伝えてくれる人がいて、この間はチュニジアの方を連れてきてこれを見せてあげたりしていました。この内容を全部つくってくれたのも、同じ子育て当事者の語学堪能なお母さんたちでした。

だからそういう動ける人、手を出してくれる人をいっぱいつくっていくということが大事なんだな、ということをいつも活動の中で感じています。

学校にあがったらどうなるか心配な面も

○濱崎

ちょっとだけなんですけれど、さっき園長先生が言った母国語とか、家に帰ったら自分の国の言葉とか話せばいいと言われてたんですけれど、でも私の長男が2年生のときは、先生から、「ちゃんと日本語だけを話してください」ってと言われてたんです。今は幸せじゃないのかなと思って。家に帰ったら自分たちの国の言葉で話して、**保育園はそのまま日本語でいいんだよって。でも小学校に上がったらどうなのかなと思っています。**でもあのときは、もう何年も前なんですけれど、でも、私も小学校から英語を、ちょっといろいろな学校に行っているんですけれど、中国人なんですけれど、中国人はもう全然日本語がわからなくて、何であの子をちゃんとサポートしないんですかって聞いたんですけれど、学校にだめだよと言われてたんです。だから今、保育園の中では頑張っていると思います、いろんな小さいこととか。でも学校に上がったらどうするかなって、ちょっと心配です。ありがとうございます。

外国人対応のできる地域

○本間

地域があって、いちょう団地だと、いちょう小学校もその中にあったので、個別で日本語がわかる子、ちょっとフォローすれば日本語でわかる子、そばについて日本語のフォローをしなければ学習についていけない子って、やっぱり外国人対応の小学校になっているんですよ。幼・保・小ということで、幼稚園・保育園・小学校で連携していく中で、小学校の校長とお話ししていく中で、やはり一番初めにお話があったように、考える力の言語をどこにするかという話になって、そこは母国語だろうということで、とにかく母国語をしっかりと、特に今は2～3歳で日本語を覚える子たちの中で。

保育園で日本語って、うちではなかなか難しいんです。日本語をしゃべる子たちが少なくて、みんな日本語ができない子たちばかりですから。日本人がいっぱいいれば、多分どんどん日本語能力がついても、日本語をしゃべれる子どもたちが少ないので、その分、大人がきちんと日本語を伝えなくてはいけないのですが。そうい

参加者
アンケートより

- 一方的でなく交流が実際に良い方向にあることを知ってうれしい。夫々の園の子育てと、その目的や成り立ち。
- 聞いていると、困ったことややらねばならぬ目的があって、次の言葉の支援を求めている場合が多い。そこをつなぐのが人だと感じた。「つなぐ人」を「知らせる人」にもしていけるとよい。

う状況でも、**母国語でしっかりと自分の頭の中で考える言語があれば、学校に行ってもしっかりと覚えられるというのが、保育園と幼稚園と小学校の連携の中で今できていて、それで母国語を大切にね、というのをすごく言っています。**お母さん方はやっぱりすごく不安で「日本語を」となるんですけども、おうちで日本語をきちんと伝えること自体がなかなか難しいので、それは保育園であったり、小学校に行っても十分にやれるから、まず自分が何人だということをしっかりと認識して、自分の母国語を大切にすることが一番ですよというのが、小学校の連携の中である地域なのです。そういうところで、お話が進んでいました。

○唐木澤

ありがとうございました。

それでは、この後は皆さんとのディスカッションの時間にしたいと思います。本日はとても人数が多いので、最初は4人程度のグループでお話をさせていただきたいと思っています。

話の内容は、「自己紹介」「これまでの話を聞いて印象に残ったこと」「日本語学習支援・子育て支援を地域ぐるみで行うためにできることは」の3点です。



参加者 アンケートより

- 各講師の話に、接点が少しずつ出てきたな、というところで終了の時間がきていたので、もっと聞きたい感じだった。関わる分野により、やれることがたくさんあると思った。それぞれができることのレベルでなく、すでに取り組まれていること、もっと地域を広げてやり方を共有できるとよいことがあるとわかった。

全体ディスカッション

○唐木澤

それでは、全体ディスカッションの時間といたします。まず全体の質疑応答を行います。質問用紙に書いていただいたことにつきまして、こちらでなるべくまとめさせていただきました。

子どもの母語について

○唐木澤

まず子どもの母語のことについていろいろとご質問がありましたので、ぜひこれは、石井先生にお話しいただきたいと思います。

○石井

このことについてのご質問が非常に多かったんですけど、母語を大事にするということに幾つかの意味があって、一つは例えば、国際結婚のケースなどで家庭の中に日本語話者と非日本語話者という組み合わせで、その後もずっと日本に住むというときに、日本語が便利なのに、わざわざもう一つの言語を入れる必要があるかというようなご質問がありました。これはもう本当にそれぞれの家庭の考え方ではありますが、ただ、言葉というのは道具として日常生活を便利にするために学習するというだけじゃなくて、**その言葉で誰とつながれるか**ということに関わるのです。例えば、お母さんでもお父さんでも、日本語以外の言語で育った人の後ろには、その子のおじいさん、おばあさんとか、いとことか、おじさん、おばさんとかいろんな人たちがいるわけです。そういう人たちと、べらべらというまではいかなかったとしても、ある程度は挨拶ができたり、ちょっと交流ができたというだけで、自分のつながりが、ここだけじゃなくてそこにも広がるという、そういう世界の広がりの問題ですよ。十分に話ができるようであれば、その社会のことを深く知ることでき、自分のアイデンティティ、別にアイデンティティは1つに決める必要があるという話では全然なくて、日本語のつながりの中で持っている自分のアイデンティティを持つと同時に、別の言語での別の文化とのつながりがあればそのつながりによるアイデンティティもあり得るのです。**言葉というのは、人が自分はどうあるかということに深くかかわっているもの**であって、単なる道具というのを超えた価値があるということを考えると、そこを親として、この子が十分に持てるはずの世界の広がりというか、そういったものをどう考えるかということなんだろうと思います。

それからもう一つは、親が自信を持って育てられる言葉と言ったことの一つには、

自信が持てるということは、コミュニケーションの量だけではなくて質が高まるということがあるからなのです。例えば日本語だけで育っている日本語話者の家庭でも、家庭の中の言葉って、言葉がよく聞こえなくてもわかっちゃうような、親が何かいつも同じようなお小言をしょっちゅう言っていると、親が口を開こうとした瞬間に「ああ、またそれね」ということだってあって、やりとりにならずに単語とか短文ですぐに終わっちゃうということもよくあります。でも家庭の中で、絵本の読み聞かせであったり、物語を話してあげるとか、あるいは「きょうはどんなことをして遊んだの?」「どんなふうだった?」「どうしてそう思うの?」など、子どもの活動や気持ちについてのやりとりを、親自身が十分に使える言葉でなら、いろいろあげたり、深めたりしていくことができます。

単なる単語の投げ合いであれば、実は言葉を十分に習得しなくても場面状況で意外とキャッチできちゃって、応答できる。そういうことを続けていくと、ごく自然なやりとりができるようになるので、学校に行っても、この子はべらべらで発音はいいですし、文法にも特に間違いはないし、普通の会話では何かを言うとなんとすぐに答えが返ってくるか、あるいは指示するとぱっと行動ができるということになると、日本語は問題ないと判定されちゃうことが多いのです。

ですが、学習ができるというのには、その「べらべら」ということとは別の能力が必要です。つまり、教師の顔を見ていても授業の内容はわからないのです。教師は同じ顔をして算数を教えたり、理科を教えたりするわけです。結局、学ぶということは、教室の場面状況を見渡すだけではだめで、言葉を頼りに論理的な展開であるとか話の筋道であるとか、目の前に見えない世界のことをきちんと頭の中に構築するということなのです。ですから単語を幾つ知っているかということも大事ですが、そういう言葉の量ではかるようなものではなくて、そういうふうに**事柄を言葉によって整理し、自分の頭の中に構築する力が育っているということが、学習ができるということ**なのです。日常の場面に即して、この場面でこう言ったらこのことだというように「場面」に即して情報をキャッチして、自然に流暢にやりとりできるという力とは違う問題なのです。例えば、親がよく知っているお話を子どもにしてあげるという活動では、お話を聞いてわかるというのは、お母さんやお父さんの語りの言葉を聞きながら物語の展開についていき、そのときに人はどうしてそういうことをしたのか、どうしてそうなったのかということ、言葉の情報の中からキャッチできるということで、そういう力は学校の勉強につながる言葉の力になっていくんですね。あるいは日常のやりとりでも、早く食べなさいとか、もう寝なさいとかそういうことだけじゃなくて「きょうはどんなことをした?」「これをやった」「へえ、どういうことがあったの?」「なぜそうしたの?」「どうしてそう思った

参加者
アンケートより

- 子育てをかこむ様々な立場の人達の参加があって、皆話したいことが多岐に渡っているようだった。実際の取組を聞くことで、地域の差が大きいことがわかった。

の？」みたいな質問をしながら続くやりとりで、「何で？」に対して自分の考えや理由を述べるというのは、実はすごく高度な日本語力なのです。それを繰り返していきっていくこと、そういうことがだんだんできるようになるということは、別に学校の勉強を先取りして教えるということではなくて、学校に入って一つずつ学んでいくという学びのプロセスを支える言葉の力になるのです。

日本語じゃない言語であってもその力が十分に育っていれば、日本語の世界に移動しても、日本語の基礎を身につけるのに多少時間がかかりますけれど、日本語でできるようになります。例えば幼児期から日本にいて、日常生活で日本語に触れて日本語で普通のおしゃべりができるという子は、母語でしっかり考えて話す力を育てていくと、日本語でいっぱい知っている言葉を使って、学習に入っていきます。ですが日本で育ち日本語のやりとりはよくできるけれど、そういう力が育っていない子は、先生から見ると「普段の日本語のやりとりではこんなにすぐに反応ができるのに、どうして勉強になるとだめなんだろう」ということになります。

話ことばだけでなく、文字の世界の意味がわかっていないという子に、平仮名を幾ら教えても、文字がどんな役にたつのか、くねくねした線に一体何の意味があるんだと思ったら学ぶ気にもならないし、獲得できない。何で字を学ぼうと思うかという、よく本を読んでもらっていたり、あるいは文字と自分の名前とか何か身近な言葉やものが対応していると感じられる経験をいっぱいして、文字というものが自分にとって意味があると思えるから学ぼうとするわけです。**親子の間で言葉を深く使うという活動を、幼児も十分楽しめる範囲でしっかりとやっておくこと**が、その後の学力につながっていくためのすごく大事な基礎になります。そういう点で、お母さんあるいはお父さんが十分に使えない日本語で子育てをして、そういう言葉だけで育ってしまうと、考えるということをしかりとやるための言葉の世界に入る準備が十分にできないまま、学校に行くということになってしまうので、そこが一番大事な点です。

ですから、もちろん親にとって母語でなくても、日本語で子どもにきちんと筋道立てて説明したり、細やかな気持ちや複雑な事柄を日本語で伝えるやりとりを親として子どもとできるのであれば、子どもを日本語で育てようという決断をしても構わないと思うのです。それはそれぞれの家庭の判断でいいことだと思います。ただ



しその決断をするときに、親として十分な言葉のやりとりができるかということだけはよく考えて、**自分の言葉の中で質的に十分に高い言語を選ぶこと**、そして、単に言葉の力を伸ばすだけじゃなくて、その言葉は**親自身が一番伝えたい思いとか価値観とか感情とかいうのを、一番伝えやすい言葉**であることに他ならないことなので、いろんな側面で考えていくことが重要です。それから、日本の社会で学校に行って成長していくといういろんなプロセスを考えると、教員には見えないんですけど、ただぺらぺらしゃべっているというだけでは安心できない問題が、今、学齢の子たちに深刻な問題として出ているという、そういうふうに影響するというだけでは、お知らせしたいと思います。

行政・専門機関との連携について

○藤井

では、続きまして、私からお答えしたいと思います。いただいたご質問の中で、「連携」に関して幾つかありました。**生活にかかわる行政・専門機関**というような話をしましたが、ご質問には、例えば、「保健師さん・保育士さんとの継続的な連携を図る上で必要なシステムづくりとは」とか、「消防署とのかかわりについて」というものがありました。

まず、消防署とのかかわりというのは、**緊急時の119番のかけ方**について講習を行うところが、特に日本語教室で増えてきたかと思います。あとは子どもであれば、**小児救命救急**で心肺蘇生法ですとか、AEDの使い方というところで、実際に消防署の方が来て指導する、ということが幾つかありました。YOKEの日本語教室でも行っています。保健師さんですと、**予防接種**のことですとか健康に関するいろいろなガイダンスなどで、来ていただいているという話を聞きます。

継続的な連携を図る上で必要なシステムづくりというのは、具体的に「これだ」というのを私は申し上げられませんが、多分、継続的にやる上で大事なものは、**活動を地道に続けることと、活動と一緒に取り組んでよかったと支援者も外国人当事者の方も、かかわる専門機関の方も、みんながそう思えるような成果を出すこと**かと思えます。例えば、消防署の119番通報をやってみると、外国人の方で日本語が余りできない方は、自分の家のマンション名を言うのが非常に大変だったりして、通報のときに住所を言うのが結構壁になってしまったりするのです。そういったことが消防の方も実地でわかるので**お互いに相手のニーズがわかって、それぞれの活動に生かすことができます**。あとは、専門機関の方には、**参加する外国人の親の方を**

参加者 アンケートより

- さまざまな支援の場があるが、外国人が必ず訪れる行政が、その「場」を案内する事をもっときめ細かく丁寧に行ってほしいと感じる。こちらでも区の職員に向けた活動内容報告やどんな相談があるかなどの実例を伝える研修と行っているが、各部署にまで浸透していない。区によっても外国人支援についての理解にバラつきがある。

みてとても熱心だという印象があるようです。その熱心さを感じて、また継続してやりましょうというふうに、結果的につながっていくことが多いように見受けられます。

外国人への情報提供について

○唐木澤

パネリストの方にも質問をさせていただきたいと思います。まず「連携」についてです。支援が必要な外国人の方に、いろいろなコミュニティーの存在を知らせるのが大変だというお話がありましたけれども、「**行政との連携**はありますか」という質問がありました。例えば、住民登録者へ案内が自動で送られるのかということについてなど、一言で結構ですのでおっしゃってください。

○川口

私が活動しているつづきMYプラザというところは、今は火曜日から日曜日まで、5つのボランティアグループが活動しています。その5グループは、ボランティア連絡会で連絡を密にとって**情報の共有**をしています。それで行政からは、つづきMYプラザにはこういうものがありますという案内をしていただくので、そういう点では一ボランティアグループですけれども、行政からの何か資料が来るとか、こちらが困ったときにMYプラザのスタッフに相談すると、そこからつないでいただけるという形になっています。**困ったことはその一グループだけで抱え込まないで、とにかくそういう窓口**に相談するというのが、一番の方法だと思います。

○本間

泉区はいちよう団地があるということで、泉区役所自体が多国籍に対応するということが多くあります。うちは公立の保育園ということで区役所とのつながりが一番あるので、いろんな、多国籍の方の窓口は、とにかくうちの保育園になっているということも事実です。多分、区によって違うんでしょうけれど、余りにもうちの特殊な部分なので、うちの地区でしたら十分な対応ができるけれども、うちの地域から外れた別なところの方をどうフォローするかというのは、それは区役所での外国人対応で苦慮しているのではないかとはいえます。

○原

拠点事業もずっと一緒にやっている共同事業でもあるので、どの区の拠点も、何かそういう事業を起こすと周知はしていただけたらと思います。私たちがいろんなツールをつくっていく中で、**こんにちは赤ちゃん訪問員の方とか、母子訪問員の方とか、業者のヘルパーさんとか、そういう方にも一応周知をしていきます**。ただ、母子手帳を渡すところについては、配付物がとても多いので、持っていくセットもすごく膨大だと聞いていますので、そこに埋もれるよりも、そういう方がいたときに「持って行ってね」ということで、一応、民生主任児童委員さんを含めて、いろんなツールができ

ると「こういうがあるので、ぜひ持って行ってください」ということをお伝えしています。行く方のキャッチというか感度に委ねるしかないんですけども。

日本語レッスンへの希望について

○唐木澤

ありがとうございました。それでは、次に、先ほど、日本語のレッスンについてお話があったのですが、日本語を学んだ濱崎さんにとって、どんな日本語レッスンの教え方であればいいかということももしあればお話してください。

○濱崎

100%はわからなくて自分の経験でなんですけれど、例えば、ボランティアの方が「リンゴを食べる」というので、リンゴじゃなくてそのほかのもののやり方の「どうやって買うのですか」と聞きます。何かいつも**本どおりだけをやって、違う例えの答えがない**みたいなのです。だから「リンゴを切る」とか「リンゴを洗う」とか、その教え方というのはなかったんですけど。また、いつも、例えば「私が」「私は」と、何かその違いは何ですか？って聞いているんですけど、でも誰からも正しい説明はなかったもので、じゃあ諦めるしかないなと思いました。

もしできれば、そのうち外国人はいろいろ、漢字は今ほもう大体、普通のカワはカワみたいな字だからってわかるんですけど、でも漢字は説明が簡単じゃないですか。物と同じだよという、それは理解できます。でも「で」「に」、「何時に行けば」「何時で」のどっちなのかわからなくて、日本語が本当に難しかったです。もしできれば、外国人には**本どおりだけじゃなくて、違ったテーマも教えてください**。お願いします。

親子日本語教室について

○唐木澤

ありがとうございました。次に、全体のディスカッションというところで、今日は日本語支援や子育て支援にかかわる方だけではなくて、**日本に住んでいる外国人当事者の方**もいらっしゃるということなので、よろしければ外国人当事者の方で、今日のテーマに関して何かご意見等があれば、お伺いしたいと思います。いかがでしょうか。

参加者
アンケートより

- ○系日本人とか○人とか○人とのハーフとか日系どここの日本人との合同で話し合いを。
- 外に出ないママの支援。アウトリーチング。無料日本語スクールの開設（最寄りの小学校との提携）

○女性A

Aと申します。台湾人です。私は来年、外国の親と子の、日本語の勉強の交流ひろばを期待しています。今回はこの場面で皆さんから、いろいろと経験などを聞きました。外国人のお母さんが日本に来たら、最初は日本語教室に通っています。それで子どもが生まれましたら、ベビーカーのときはまだ連れていく分で大丈夫。ところが、うちの会は、ベビーカーはオーケー、でもベビーカー以外だと、あちこちを歩いてちょっと大変そうなときは、子連れで一緒に勉強できません。それで、学習者から聞いた、**家でもしお母さんの日本語が余り上手じゃなくて、勉強続けたいだけけれど、子どもと一緒ににはできない。**だから今、私が考えていることは、お母さんが自分でできることで、できることを考えます。例えば、日本人も子どもが保育園に行く前に家で子どもを教えるのに、絵カードなどで教えるといった、外国人のお母さんもツールのようなことで使って、子どもを教えるんじゃなくて、自分もその場で少しずつ覚えることを考えています。ところが実際は、今一番悩むのは、どのくらいの期間と内容でやればいいのかでちょっと今は頭が痛いです。皆さん、何かご意見があれば、ちょっとアドバイスいただきたいです。

○唐木澤

親子日本語教室を開きたいというお話なんですけれど、パネリストの方で何かアイデアがありましたら、いかがでしょうか。

○女性A

日本語じゃなくて大体の今、私がやりたいことは勉強の方法で、2人で教室に行ったら、お母さんは絵カードでできるお母さんの**生活の中で、どんな好きな言葉の絵カードを使って、教室に通えなくても、家で少し一緒に遊びながら勉強します。**ところがどんなふうにもこのような方法が使えるのか。小さい子で、余り時間が長過ぎるとだめ。今、そこが頭が痛い。

○川口

もし、ご自分で勉強したいということなら、「おかあさんといっしょ」とか、ああいうのを子どもと一緒に見るとか。そうすると、自分でも少し日本語が入るかもしれないですけど。

○女性A

友達から聞いた、あるとき、お母さんと日本語の発音が正しいかどうか心配なので、なかなかできないことがあると。そのような人たちは、どんなふうに学ぶことができますか。

○川口

これはボランティアではないかもしれないですけど、スカイプとか、フェイスタイムで教えている方もいらっしゃいます。私は詳しくはないんですけども。

○女性A

でもこれは、必ず時間をかけて勉強する。例えば、家でお母さんの都合がよい時間そのまま。CDだとかのほうがいいですか。私はよくわからない、方法がありますか。

○川口

やはり発音はちょっと難しいですね。

○女性A

難しいですね。一番、多分、私たち外国人親や子どもに日本語を教えるので心配なことが、この一つ。それでさっきの絵本で読むというのを、友達がそんなふうにしたら彼女の息子に、お母さんの発音がおかしいと言われた。お母さんはすごくストレスと言っていて、そういうこともあります。



参加者
アンケートより

- 日本社会とのインターフェイスを担える外国人の担い手がこれから大切になると思います。
- 行政のしくみとしてネットワークを作っていくよう期待します。

○唐木澤

ありがとうございました。時間が来てしまいました。この後のミニ交流会でパネリストの方も残ってくれると思いますので、もう少し詳しい話をしたいという方は、ここでお願いしたいと思います。最後に石井先生に、簡単にまとめていただければと思います。

○石井

きょうのこの場にも多様な方が来てくださっていて、そして男性が多いというので、私はすごく勇気づけられました。ぜひ、子育てをお母さんだけのものにしないでください。それぞれ視点が違うので、日本人だけじゃなくていろんな人たちがいるのと同様に、男性だけじゃない、女性だけじゃないということも含めて、多様な人が子どもにかかわるといことが、多分一番大事なことだと思います。

そう考えると、例えば台湾のお母さんが、日本語の発音も文法も語彙も全部教えなきゃいけないと思うと苦しくなっちゃうけれど、そのうちの発音は日本のテレビでもいいし、その辺に遊びに行ったらすぐに覚えるから発音はいいや。そんなことよりも、もっと自分が教えられる、自分だから得意なことをやればいいやというふうにみんなが思えると、ストレスにならない。私はこれがだめだなと思ったときに「このことをちょっとやってよ」というような相手を見つけることによって、親もつながるし、そのことで子どももつながるといふうに、やっぱりいろんな人がかかわるといことを実現できたら、親も子どもも社会もハッピーじゃないかと思ひます。

○唐木澤

ありがとうございました。報告書の最初のページに、「この調査報告が、外国人親子の支援を考えるきっかけや、日本語学習支援と子育て支援の連携に向けた何らかのヒントになれば」、「少しでも皆さんのヒントになれば」といことが書いてあります。短い時間でしたが、参加者の皆さんがそれぞれに何かのヒントを持ち帰っていただけたら、私たちも幸いです。きょうはありがとうございました。

○司会

前に座っていらっしゃるパネリストの皆さん、基調講演をさせていただいた石井先生、皆さんには忙しい中で時間をつくってご協力をいただきました。

改めて皆さんで、最後に感謝の拍手をお願いします。(拍手)

それでは、以上をもちまして「就学前の子どもと親の支援に関する取組調査・報告会」を終了したいと思ひます。皆様、本日のご参加ありがとうございました。(拍手)



在住外国人

子育てシンポで情報共有

高い日本語学習支援ニーズ

就学前の子どもを持つ在住外国人の支援について話し合うシンポジウムが8月30日、中区の開港記念会館で行われた。横浜市国際交流協会の主催。

これは同協会が昨年度まとめた調査の報告会として

高年が日々をイキイキと暮らすクラスが満載。新たな趣味や仲間づくりにも最適で、アットホームで丁寧な

行われ、支援の推進や関係団体の連携強化をめざした。日本語教室を行う団



基調講演を行う石井教授

体や、日本で子育てを経験した外国人保護者など70人が参加した。

報告からは日本語学習支援や子育てへのニーズが高いことが分かった。基調講演を行った東京女子大学の石井恵理子教授は「子育てする言語は母語、日本語と決めつけず、親が自信を持てる言語で」と語りかけた。

参加者からは「親が学ぶ姿を見せることが大事。子どもが勉強に来たがり、親に誇りをもてる」といった声が聞かれた。

2015(平成 27)年度横浜市委託事業日本語学習コーディネート業務

就学前の子どもと親の支援に関する取組調査・報告会

～外国人親子の日本語学習支援子育て支援事情～ 実施報告書

本報告書は、横浜市の委託により、公益財団法人横浜市国際交流協会が作成しました。

発行日 2016(平成 28)年 3 月

編集・発行 公益財団法人 横浜市国際交流協会

〒220-0012 横浜市西区みなとみらい 1-1-1 パシフィコ横浜 横浜国際協力センター5F

電話 045-222-1173(多文化共生課) <http://www.yoke.or.jp/>